# 宇宙の絆

秋華

# ゲーム！宇宙の絆

　グリード「補給線のびてるけど大丈夫か？」
　サイファ「楽勝でしょ。この倍くらいまでなら大丈夫だよ。」
　グリード「そっか。いや、補給が安定するとこれだけ楽勝できるなんて、すげえな。」
　サイファ「まあね。最近は遠征多くなってきたからね。」
　グリード「だよな。サイファさん、うちの軍はいってよ。」
　サイファ「いやいや、今のが気楽だし、儲かるからね。ああ、ギャラよろしくね。（笑）」
　グリード「残念だな。ああ、今回の勝利でかなりの利益がでそうだから、色つけるよ。」
　サイファ「サンクス！あ、敵が陣形変えてるよ。」
　グリード「ようやく愚かな陣形に気がついたな。でももう遅いけど。」
　サイファ「だね。Ｕ字陣形で確実にいったら？」
　グリード「いや、こっちは指揮が高まってるから、Ｉ陣形で一気に決めるよ。」
　サイファ「そっか。じゃあこっちにも被害でそうだから、折を見てこっちは引くね。」
　グリード「ういうい。」
俺の名前は、サイファこと神村達也、２０歳になったばかりのニートだ。
毎日毎日ＰＣのモニターを睨んで、チャットしながらネットゲームをしている。
まあ、ただのニートではなく、今プレイしているネットゲームで、最低限の生活費は稼いでいるので、それをニートと呼ぶのかどうかは不明だ。
プレイしているネットゲームは、無料参加できるゲームだが、質も人気も現在ナンバーワンで、会員は１０００万人を突破している。
どんなゲームか気になる人もいるかと思われるので説明すると、昔流行ったアニメ、ガンダムと銀英伝を足して２でわったような戦闘もの。
宇宙と星と、要塞と地上と、とにかく広大なスケールの陣取りゲームだ。
まあそれだけだったらただのネットゲームで、ユーザーは限られてた人に収まっていたのだろうが、このゲームの魅力はゲームだけではない。
ゲーム内の通貨、ドル以外に、リアルマネーの円が自由に動かせるのだ。
そうする事で、どういった事がおこるのか。
ゲーム内のアイテムを、リアルマネーで取引する事は当然で、リアルな物も簡単に取引ができてしまうのだ。
某ネット銀行が提携していて、ゲーム内で使うリアルマネーを管理している。
支払方法はいろいろ存在するが、今話す事でもないので割愛する。
まあそれができる事で、ゲーム内でリアル企業がリアル物をネット販売しているのだ。
言ってみれば、セカンドライフと楽天市場とネットゲームをうまく融合させたような感じだ。
で、買い物すれば、ゲーム内アイテムがもらえたり、ゲーム内イベントが発生したりして、ゲーム内での利益も得られるから、みんなココで買い物をするわけだ。
ゲームをプレイしていない人も、アイテムがリアルマネーで売れたりするから、一般人もココで買い物をして、アイテムを売って利益を得れるから集まってくる。
後俺みたいに、ゲーム内の兵器を安く買い取って、チューニングして高く売ったり、アイテムに手を加えて売っている奴もいるのだ。
とにかくこのゲームはあらゆる面で、俺を含め沢山の人々のハートをつかみ、ネットゲームの代名詞的存在になったわけだ。
そして今日も俺は、このネットゲーム、「宇宙の絆」をプレイしていた。
先ほどの会話は、ゲーム内でのチャットによる会話。
同じ軍に所属していれば、チャットができる。

それで作戦や指示を伝えて、敵軍と戦闘するのだ。
で、内容だが、俺はサイファ、軍の大将がグリード。
俺はグリードの軍に、ゲストとして参戦している。
一言で助っ人だ。
俺は補給が得意、いや自分でいうのはアレだが、おそらくはナンバーワンで、だから補給部隊で助っ人していた。
俺の華麗な補給により、勝利を目前にしたグリードは、俺を自軍に勧誘してきたが俺は断った。
なんせ助っ人でリアルマネーを稼いでいたりするのだ。
そう簡単には今の状況を手放せない。
で、最後のあがきを敵軍がしてきたので、俺は勝利も確実なので戦線離脱とあいなったわけだ。
てか、残党狩りと残骸集めをするんだけどね。
まあ、補給の助っ人以外にも、ジャンク屋もやってるってわけ。
おそらく、このゲームで今一番稼いでいるのは、俺かもな。
　グリード「今日はサンキュー！後で金は振り込んでおくよ。」
　サイファ「よろ！」
最終的には、グリード軍の圧倒的勝利で終わった。
結構重要な拠点、宇宙に浮かぶ要塞を占拠する事ができたから、これでグリード軍も一大勢力になるのは確実だ。
こういった勢力に恩をうっておくことも、この世界で生きて行くには重要。
今日は上々の収穫だ。
お金はいり～の、大勢力と仲良くなり～の、残骸いっぱいはいり～の、レベルあがり～の。
でも、残骸がこれだけ沢山入ったのは、特にラッキーだったな。
グリードが最後、Ｕ字陣形にして時間をかけて完全勝利を目指してたら、味方の被害は皆無だっただろうし、敵ももっと完全破壊されていただろうから。
おそらく時間が無かったんだろうな。
俺の顔は、意図せず笑顔になっていた。
さて、俺はグリード軍から抜けると、本拠地であるシリウス要塞へと帰投した。
旗艦をドックに入れて、今日の収穫をチェックした。
　達也「ほう。生き残りがいたのか。ラッキー！」
生き残りとは、戦闘で生き残った敵軍のＮＰＣの事だ。
ＮＰＣとは、コンピュータがＡＩにより勝手に動かすプレイヤの事。
ＡＩとは人口知能ね。
まあ、部下にできるかもしれない人材をゲットしたって事かね。
俺は登用ボタンをクリックした。
　達也「うっし！」
ＮＰＣのチャーリーは、あっさりと俺の部下となった。
ちなみに俺は、軍にも所属していないし、軍の大将でもない。
そんな俺が部下ってのもおかしな話だが、まあ在野の仲間が増えたと考えてほしい。
ああ、ココでひとつ説明しておくと、ＮＰＣの忠誠心によって仲間になる確率は変動する。
今回の奴は、おそらく上官への忠誠心が低かったのだろう。
レベルも低いし、登用されたばかりだったようだ。
俺は早速そのＮＰＣのＡＩデータを開いた。
　達也「うわぁ～攻撃一点張りだな。」
俺の部下にはあまり合わなさそうだ。
まだレベルが低いから、変更しても問題なさそうだが、俺はそのまま人間弾幕部隊（俺命名）の人型第２部隊隊長に任命した。

あ、ココでまた説明だが、人型とは、人型ロボットの事で、ガンダムのモビルスーツのパクリみたいなものだ。
このゲームの戦闘は、この人型と、戦闘機、そして戦艦の３種を中心に行う。
他にもいくつかあるが、それはまた別の機会に。
で、人型は接近戦や地上戦に強い。
コストは若干高めで、宇宙戦を得意とする俺にとっては、あまり使わない兵器だ。
ＡＩを全く書き換えずに、俺はチャーリーの画面を閉じた。
俺の変なポリシーだが、よっぽど使えないか、新人以外のＡＩは、なるべく書き換えないようにしていた。
次に俺は、全体マップを開いた。
画面いっぱいに宇宙のマップが表示される。
右下側には赤い点が沢山、真ん中上側には青い点が沢山、左下側には黄色の点と卵色の点が沢山あった。
このゲームの世界は今、３人しかいないＮＰＣ大将が率いる軍と、プレイヤ名ジークが率いる軍で４つに分かれていると言っていい。
もちろん他にも沢山のプレイヤが大将となり、拠点を持ってはいるが、この４軍と比べるとまだまだ小さい。
このゲームがスタートした時は、ＮＰＣ軍３軍が３分していたわけだから、この２年でだいぶ変わったと言えば変わったのだろう。
始まった頃は、マップ数も少なく、ＮＰＣ軍を倒すのはほとんど無理な状態だった。
俺も始めた頃は、ＮＰＣ風の魔人軍に属していて、日夜補給していたものだ。
ちなみにＮＰＣの後２つの名前は、氷の虎、炎のドラゴンね。
地味な仕事で、正直面白いものではなかったが、まあのめり込むつもりもなかったからこれで良かったんだよな。
ゲームを楽しみたい奴は、戦闘重視でレベルを上げて、前戦で戦ったり、人型乗りになったり、まあそっちのが楽しいだろうから。
それにマップの数が少ない最初は、移動時の補給なんてほぼ無用だったし、補給関係のレベルを上げる奴なんていなかった。
でも、徐々にマップが増えて広くなって、予定の１００００マップになって宇宙が完成した時、俺の補給が重宝されるようになっていた。
今俺が、リアルマネーを稼げるほど助っ人として重宝されているのは、はっきりいってたまたまだ。
で、まあ補給を極めるために戦闘機設計やらもしていたから、それらの機体を買ってくれる人も多くて。
少し話を戻すが、半年前までは、風の魔人軍が徐々に勢力を伸ばしていったんだ。
俺のおかげで。
このままＮＰＣ軍が宇宙統一に向かうのかと思われていた。
ココで大事な話をしておこう。
このゲームの人気が、これほど大きい理由が、先に述べただけではない事は、おそらくみんなわかるだろう。
え？わからない？
１０００万人突破だよ？
まあ、先に述べただけでは無理なのだ。
もうひとつこのゲームには魅力があったのだ。
ＮＰＣ軍以外の軍が、宇宙統一をした場合、その軍に報酬１０億円がもらえるという事。
これにみんな飛びついたんだ。
みんな軍を立ち上げ、仲間集めに躍起になった。

統一したら、報酬の１％を上げるとか、アイテムでつったり、リアルマネーでつったり。
一時はプレイヤの半分くらい軍にしたかもね。
でも、小さい軍は簡単に負けた。
ＮＰＣ軍は最初から大勢力だったからね。
それでもまあ地道に頑張る軍もあったし、今も残ってるところも多いけど、ＮＰＣ軍の牙城は高かった。
でも半年前、簡単にＮＰＣ軍に対抗出来る軍を作った奴がいた。
ジークだ。
ジークは最初、俺と同じ風の魔人軍に席を置いていたが、徐々に階級を上げてナンパー２まで上り詰めた。
そして工作に工作を重ねて、大きな反乱を成功させたんだ。
俺はそれに巻き込まれるようにして、風の魔人軍を抜けた。
あの時は俺もやばかった。
なんせジークの下で、はたらいていたからな。
反乱したら敵を多く作りそうだったからジークにはつかない、でも、風の魔人軍からは敵と認識される。
もう必死に逃げたよ。
死んだら大変だからね、このゲーム。
お金以外全てリセット。
自身のレベルも半分になるから。
このゲームはうまくやれば、ほとんどの場合死なないけど、流石に戦力差が大きすぎるから、死にかけた。
我が指揮下には戦艦５隻なのに、敵は１０００隻とかだもんな。
それに補給特化だし。
でも、逃げる算段は常に万全にしてるから、なんとか無事帰投。
それから放浪の在野をしているわけだ。
さて、俺は自分の部隊の画面をチェックした。
まずは旗艦「補給くん号」。
正直真面目にやるつもりじゃなかったので、適当につけた名前だ。
変更もできるが、愛着がわいているから変えるつもりはない。
もちろん旗艦だから、サイファ自身で動かしている。
人型乗りになりたいプレイヤは、艦長をそだててそれに任せてる奴もいるが、死ぬ確率が上がるからあまりやってる奴はいない。
他に戦艦を１０隻もっている。
うち８隻は補給艦で、残り２隻が戦艦だ。
どれも俺がカスタマイズしているので、補給艦の癖にスピードは高速戦艦クラスだ。
旗艦と補給艦には、戦闘機と補給機が搭載されているが、どちらもディフェンス重視の機体が多い。
戦艦はむしろ護衛艦的役割で、戦闘機と人型が搭載されている。
全てを一言で言うと、銀河１のディフェンスと、宇宙１の逃げ足を持った補給部隊だ。
さて、自分の部隊を眺めていても、金も儲からないし強くもならない。
俺は拾ってきたパーツを選別し始めた。
数が多く、嬉しいやらしんどいやら。
　達也「おっ！ボイスレコーダの記録が残ってるよ。」
さっそく記録を開いた。
そこには、敵の通信記録、すなわちチャットログが残っていた。
このゲームは、偶にこういった記録を手に入れる事ができてしまうから、個人的なチャットは控えた方

がいい。
チャットには細心の注意が必要だと、改めて思った。
他には欲しかったパーツや、売れば高そうなのが色々出てきた。
攻撃系パーツは、俺にはあまり必要ないから、最低限以外は全部売る事にした。
売りリストにパーツと値段を登録した。
登録したとたんに、いくつかが売れてゆく。
今日売りにだしてるのは、円では無くドル。
ゲーム専用のお金が少し増えた。
ゴミがあらかた片づいたので、俺は戦艦制作に移った。
今俺は、次期旗艦予定の戦艦を作っていた。
てか、補給艦なんだけど。
それでも若干戦艦に近いものだ。
このゲームは、戦艦の形と色、パーツ、出力など、全て好きにカスタマイズできる。
で、それらを決定して組み立てていくわけだが、なかなか思うようには作れない。
それは、自分のキャラのレベルに依存したり、メカニックＮＰＣのレベルに依存したり、運だったり、アイデアだったり。
競艇のエンジンとペラのように相性もある。
同じ物は２度と作れないのだ。
組み合わせ、テストして、分解して、また組み合わせて、とにかくひとつずつ試していった。
凄くしんどい。
だからこうやって完成した、高性能な機体は、リアルマネーでも売れるのだ。
中でも戦艦はコストも高いし、そうそう作れるものでは無いから、良い戦艦が売りに出される事はまずなかった。
だから今作ってる戦艦も、自分で使う為のもの。
過去、旗艦を作ろうと何度も頑張った結果が、持っている他の１０隻なのだ。
しかし今回のは、マジで良い感じだ。
補給艦の癖に、高速戦艦以上のスピードと破壊力。
何か間違ってるとは思うが、ゲームだからこういう事も偶にある。
まだ完成していないから、ここから並になってしまう可能性の方が高いが。
でも山はこえてるよな。
俺はこの日の残りの時間、ずっと戦艦作成に燃えていた。

# ショボイ戦い

サイファに対して、設定により、ジーク軍と風の魔人軍から敵登録されている。
この登録をしていない軍は、在野の俺に攻撃をする事ができない。
助っ人に入ってる場合は、もちろん敵からの攻撃はうけるが。
まあ、俺にとっての敵は、同じ在野のプレイヤと、ジーク軍と風の魔人軍ってわけだ。
友好状態の軍は、昨日助っ人したグリード軍など数十軍いる。
これらの友好軍は、俺が旗揚げして軍を立ち上げたとき、初期状態が１ヶ月の同盟関係となる。
とまあ、敵と味方を改めて確認したが、超大勢力２つを敵にしてるのはいかがなものか。
そう思った俺は、今日は無償で氷の虎軍に属するサクラさんの助っ人をする事にした。
対戦はジーク軍。
目指すは最前線の拠点。
おそらくこの位置なら、ジーク軍の本軍は間に合わないから、楽に勝てると思っていた。
しかし思わぬ苦戦。
流石というか、強かった。
俺がかつて所属し、強者がそろっている軍。
数では圧倒しているのだが、時間がかかった。
氷の虎軍の今回の隊長は、中将のレイズナーさんだ。
決して下手では無いが、俺は見ていてじれったかった。
レイズナーさんからの通信は、俺のところには届かない。
こちらからも通信できない。
まあ、システムとしては出来るのだが、回線をむやみに開くと、敵に盗聴されるおそれがでてくるのだ。
作戦が漏れれば対応されてしまう。
だから俺が通信できるのは、今はサクラさんだけだった。
　サイファ「サクラさん、このままだとじり貧です。敵の隊長、俺知ってるんです。ココは削りあいにもっていくしかないと思うんですけど。」
俺は作戦の提案をした。
　サクラ「大丈夫だよ。勝てる勝てるｗ」
返ってきた返事を見て、俺はがっくりした。
この人ヘボだ・・・
ゆっくりしてたら、ジーク本軍が来るかもしれない。
俺は逃げる準備をした。
真っ先に無傷で逃げたら、反感かうだろうなぁ・・・
俺はため息がでた。
　サクラ「サイファさんも、敵軍突破を防ぐのを手伝って。１度止めれれば勝利が決定するから。」
サクラさんからの命令。
おそらくはレイズナーさんからの命令なのだろうが、補給艦に戦力期待するなよな。
俺は泣きたくなった。
しかたないなぁ。
俺は補給機を戻して戦闘機を展開した。
ゆっくりはしていられない。
敵は高速で近づいてくる。
補給を止めてられる時間も多くはない。
すぐにどこかに歪みがでてくるはずだ。

止めていられるのはせいぜい１分だ。
俺はサクラ艦隊の左をつく敵軍の前に、一気に弾幕をはった。
まさか補給艦が、これだけの弾幕を展開できるとは思わなかったようで、一瞬敵軍の動きが止まった。
　サイファ「今！射撃です！」
俺はなるべく短い言葉で、行動を促した。
しかし、サクラさんの軍は動かなかった。
なんで？
しかも俺の旗艦の周りに集まり始めた。
　達也「落ちてるしぃ～！」
そうなのだ。
サクラさんはネット回線が切断されていたのだ。
行軍、戦闘中に落ちた場合、部下にプレイヤがいる場合は、旗艦以外はプレイヤの中で一番階級の高い者の指揮下に入る。
いない場合は全軍自動撤退だ。
俺がいたから撤退はしないが、旗艦だけは高速で撤退を始めた。
俺は慌ててサクラさんのＮＰＣに一斉攻撃を命令。
陣形をＩ字陣形に変更して全速前進。
更には、補給機展開。
サクラさんの艦隊を盾にして、俺は全速で逃げる形だ。
しかも敵軍も壊滅状態にできるかもしれない展開。
　達也「落ちたサクラさんが悪いのだ。」
俺は悪代官のように独り言を言った。
その後何とか敵軍に勝利したが、サクラさんの艦隊はほぼ壊滅していた。
俺はちゃっかりサクラさんの残骸を集めて持って帰った。

# 対海賊船

いや～拾い放題だぜ！
今日は友好関係の軍どうしの対戦に、戦場で残骸拾いをしていた。
友好関係の無い軍の戦場でこんな事をすると、すぐに敵対されるからな。
もちろん両軍には許可をとっている。
勝手にこんな事をすると、不信感をいだかせる事になるから。
おれは拾い放題のアイテムにルンルン気分で画面を眺めていた。
この様子だと、おそらく数万円の儲けが出るかもしれない。
なんて思っていると、知らない艦隊の機影が見えた。
警告を表す赤い光が点滅する。
こちらに攻撃可能な機体が近づいたら、コレが点滅するのだ。
最初は残骸拾いに来たプレイヤか、初心者が迷ってきたのかと思っていた。
俺は普通に通信を試みようと思った。
しかしその機体が表示されて、俺は通信をやめた。
そのプレイヤの機体は何とも禍々しい機体で、色は真っ黒。
自分でペイントしたのだろう、ドクロのマークが見えた。
　達也「海賊かよ！」
海賊にはドクロのマークを付けるのが、暗黙のルールになっていた。
海賊とは、主に在野のプレイヤを壊滅させて遊んでいるプレイヤの事だ。
中には軍にもたてつく奴がいる。
俺は残骸拾いを中止して、直ぐに逃げる準備をする。
しかし、相手は海賊、速攻で攻撃してきた。
護衛艦の弾幕が、最初の攻撃をなんとか防いでいた。
俺は慌てて人型を展開。
背後をつかれているので、戦闘機では小回りがきかない。
チャーリー発お披露目～
先日ゲットしたチャーリーを初めて使う時がきた。
しかし、ＮＰＣは使ってみるまでその能力の全てを理解する事はできない。
果たしてどれほどの活躍をしてくれるのか。
せめて俺を楽に逃がしてね。
とりあえずディフェンス重視の命令。
かろうじて防いでいる。
やはり守りはきついや。
機体のチューニングは完全守りなのだが、いかんせんチャーリーは攻撃型だ。
撤退準備はまだ終わっていない。
大量損失覚悟で、即撤退か。
それとも現状維持でチャーリーに期待か。
もしくは、反撃？
俺はほとんど攻撃をしたことがない。
まあ少しとか、弱い相手とか、無いことはないのだが、今回のような海賊など勝てる気がしないから。
でも、少し試したくなった。
チャーリーの攻撃力も見たいし、とりあえずこのままやられっぱなしもしゃくだから。
俺は戦艦の弾幕をありったけぶちまけた。
これで１０秒ほどは無敵だ。

すぐに補給機のしょぼくれ砲発射。
当たっても痛くない攻撃だが、牽制やフェイントにはなる。
相手がうまくのってきた。
しょぼくれ砲に、ご丁寧に弾幕。
さて、後はタイミング。
しょぼくれ砲に対して、こちらの弾幕よりも強力なのを使われていたら、後は逃げるだけ。
しかしもし、それ相応の弾幕を使っていたら。
なかなか戦いなれしている海賊だ。
きっと・・・
俺の予想は当たった。
俺の弾幕より、敵の弾幕が先に薄れだした。
今だ！
　達也「いけ！チャーリー！」
護衛艦から飛び出していた人型と戦艦の一斉攻撃。
反応は早い。
　達也「おお！早すぎる？」
敵の弾幕は完全には消失してはいない。
今突撃したらこちらに多大なダメージが。
このスピードなら、相手が反応する事は無理だろう。
こっちの攻撃が届く前に弾幕が消えるか、残るか。
それだけだ。
ギリギリのタイミングで、弾幕が消失した。
　達也「よっしゃ！」
俺は直ぐに逃げる準備。
Ｉ字陣形全速ぜんし・・・
あら？
俺はゆっくりと反転して菱形陣形にした。
なんとチャーリーが海賊の旗艦を戦闘不能まで破壊していた。
チャーリーおそるべし。
海賊は、ボロ戦艦で必死に逃げようとしていた。
どうしよ？
そんな事を思いながら、既に攻撃機を展開していた。
無意識に攻撃していた。
海賊は壊滅していた。
あーあ。
これでこの海賊はしばらく復活しないな。
掃討して残骸を集めた。
レアなパーツもＮＰＣも、大量にゲットしてしまった。
そこそこの軍にも対抗できるだけの、人材と兵器を手に入れた。

## ボロ負け

３日後、俺の艦隊は、旗艦が１、戦艦が４、補給艦が１２、制作中戦艦が１となっていた。
しかも全てにＮＰＣを配置し、参謀や個々の機体にまで配置できる有様だ。
あの海賊はかなりの使い手で、ＮＰＣのレベルもかなり高かった。
てか、名のある最強の海賊だったようだ。
俺が勝ったのは、完全に相手の油断、おそらく友達に強さの自慢でもしようと、初心者にでも指揮させてたんじゃね？
普通補給部隊にやられる訳ないしな。
ただ、一撃必殺の攻撃を持っていて、それがたまたま当たっただけなのだ。
俺は笑いが止まらなかった。
でも流石に艦船が１０を越えてくると、指揮系統がきついな。
今日もグリード軍の助っ人だが、まあ今までどおりの数でいいか。
俺は新しい面子全員と、一部の古面子で足りないところを埋めて、戦場に赴いた。
グリード軍は敵を圧倒していた。
敵はジーク軍だが、本拠地から離れすぎてる辺境の地だし、戦力が少なかった。
今日も楽勝だなぁ～
俺は椅子の背もたれにもたれ、腕を頭の後ろに組んでただディスプレイをみていた。
しかし、なかなか敵軍を壊滅させられない。
少しずつ削ってはいるが、ジーク軍はしぶとかった。
ここまでこの戦力で頑張る必要があるのだろうか。
疑問がわいた。
この空域に、援軍はまずこれないだろう。
時間稼ぎは無意味だ。
何故？
ふと、俺はこの戦場のマップが、かつて自分が攻略したマップである事を思い出した。
ジークの元にいた時の事だ。
あの時はプレイヤがココを守っていて、戦力は負けてたんだ。
でも、俺がふと思い立った作戦。
マップ上部にある隕石群。
ココって突破できないだろうか？
そう思って試したんだ。
航行レベルが後少し低かったら、運が後少しなかったら、俺は突破できなかっただろう。
しかし俺は突破したんだ。
敵の背後を突いた。
敵軍は混乱し、その混乱の中ジークが突撃。
終わってみれば圧勝だった。
やばい！
俺は思った。
　サイファ「撤退準備を」
俺がそう通信した直後、背後に機影が見えた。
やっぱり。
　グリード「どした？援軍か？」
返事が面倒だったが、俺は撤退準備をしながら返事を返す。
　サイファ「大援軍」

そうこうしてる間に、その数はどんどん増えた。
多すぎだよ。
まだ間に合う。
俺は射程距離に入る前に艦隊全てを反転させ、Ｉ字陣形、しかも旗艦は二列目に。
コレはもう、旗艦だけでも逃げるぜ陣形だ。
正面の機影は、１０００隻ほど。
後ろにグリードの艦隊が戻ってきた。
その時、通信が入る。
俺は回線を開いた。
　ジーク「おひさ！（笑）」
ジークの艦隊は、射程ギリギリで止まっていた。
　サイファ「裏切りものぉ～（泣）」
俺はとりあえず泣きついてみた。
　グリード「どうする？」
ジークとの通信のあいまに、グリードからも通信が入る。
　サイファ「ちょっと待って」
俺はジークとの通信を優先した。
　ジーク「裏切ったのはそっちじゃん？こっちについときゃ良かったのに。」
　サイファ「俺に、あんた以外全てを敵にまわせと？」
　ジーク「宇宙統一には、いずれそうなるんだから。」
ああ、確かにと思った。
でも今更言っても遅い。
　サイファ「逃がしてはくれんかね？」
最後の望みを託してみた。
　ジーク「却下！」
ガックシだった。
　ジーク「サイファが今俺の最大の敵なんだよね。悪いけど味方にならないなら死んでもらうよ♪」
その言葉が最後だった。
ジーク艦隊が動き出した。
俺は通信を切り替え、グリードに最後のメッセージ。
　サイファ「突破口を開く。進路は下。」
　グリード「ええ？下？」
俺はもう返事をする余裕は無かった。
たかだか１１隻の艦隊なのに、命令が間に合わない。
これほど追いつめられるのは初めてだ。
ちなみに、グリードが動揺した、下への進路。
実はこのゲームは基本は２Ｄである。
しかし、宇宙なら上下２艦隊分のスペースがもうけられていて、地上だと上３、下１くらいのスペースがあるのだ。
陣形は全て２Ｄのみなので、上下を使う場合は、プレイヤがその分必要となる。
もしジークの艦隊が単独なら、上下は開いているはずだ。
俺はその望みに賭けた。
ジークとの通信はつないだままだったようで、ジークの言葉が聞こえる。
正確には表示される。
　ジーク「下か。運が良かったな。そこは開いてるからな。」
俺は心の中でガッツポーズした。

だからといって、戦力は圧倒的に負けてるし、やられる可能性が９０％から５０％くらいになった程度だ。
上からの攻撃が、俺の艦隊を襲う。
もうなにがなんだかわからない状態だった。
とにかく搭載機を全て出撃、使える弾幕は全て使った。
旗艦にも被弾する。
俺は装甲を極力削り、スピード重視だ。
被弾した時の被害は大きい。
左エンジンが即停止した。
俺はサブエンジンに切り替える。
進路が少し左にずれる。
必死に進路を修正する。
近づく敵艦隊の鼻先にチャーリーの威嚇射撃。
思った所に撃てない。
くそっ！
射線がずれてやがる。
グリードも後ろについてくる。
グリードの攻撃が、若干こちらへの攻撃を和らげる。
それでもジークは俺の旗艦狙いのようだ。
艦船いくつか捨てるか。
俺は自身の艦船を盾に、何とか突破した。
　達也「うしっ！」
ガッツポーズをした後、速やかに戦場を離脱した。
生きた心地がしなかった。
グリードもかなりの被害だったが、俺より全然マシで無事帰還を果たした。
ドックに戻った俺は、被害状況を確認していた。
失った艦船が戦艦２、補給艦３、ＮＰＣが６人。
何とか死なずにすんだが、被害は莫大だった。
しかしまもなく、ＮＰＣが４人帰ってきた。
捕らえられていたが、登用に失敗して逃がされたようだ。
後２人は登用されたのか、それとも捕らえられたままなのか、それとも処刑されたのか。
まあ、逃がしてくれたジークに、少し感謝した。
って、感謝できねぇ～

補給くん号の被害は大きく、元の能力に戻す事は不可能だった。
一応修理とか、パーツ交換とか、無いものは他のパーツで代用したりしたが、相性やらが合わないようだ。
まあ、旗艦が無いと出航できないので、とりえずこれで我慢だ。
といっても、コレで戦闘に出てやられるのもいやなので、しばらくは戦闘はしないことにした。
それよりも、作成中である旗艦候補の補給戦艦を完成させようと思った。
ジークにやられた事で、装甲を厚くしようかなやんだが、やはりそのままにする事にした。
エンジン系統と出力も良いだろう。
俺はスピード重視だからな。
問題は武装。
ココでひとつ、俺はある研究をしていた。
このゲームには、ドルをつぎ込んで、研究というコマンドを実行できる。

これは、希望する武装パーツを、詳しくどういったものか書いて、予算を決めて、それをこのゲームを運営している「宇宙ネット」に提案するのだ。
それをゲーム審査員が、予算や武装の内容を検討し、提案をそのまま、或いはそれに準じるパーツを、作成可能にしてくれると言うわけだ。
もちろん、ゲームバランスが崩れる提案は、予算だけ没収されて受け入れられる事はない。
だから実現可能で、無理の無いところをうまく狙わないといけないのだ。
後はアイデア。
ちなみに俺が今研究しているのは、全方位発射可能な弾幕用砲塔群。
各方向をカバーする為に、いちいち武装していては艦船が重くなる。
それを解消するためのもの。
コレさえ完成すれば、防御力大幅上昇、スピード上昇、積載量も増えるし武装も可能。
こうして待っている時間も、研究時間としてゲームマスターが調整しているから、早く返事をくれと催促もできないのがじれったかった。
後はコレ待ちだな。
俺はそう思い、人型や戦闘機、補給機を作成していった。
かなりやられたから、沢山必要だった。
金が半分くらい減った。
さて、一段落して、俺はネット回線を切った。
ジークとの敗戦で、俺のハードでの欠点を見つけてしまった。
やはりマウスで選んでクリックしていては、反応が遅いし、数がある場合は指揮しきれない。
俺は秋葉原へと出かけた。
目的の物は、宇宙の絆用のコントローラと、タッチパネルディスプレイ。
コントローラは言うまでもない。
キー設定を色々して、ダイレクト命令を多く登録できる。
そしてタッチパネルディスプレイも、サブモニタとして使用でき、命令をクリックではなくタッチでできるから時間短縮になる。
更には艦内からの視点映像も見れて、臨場感抜群だ。
俺は久しぶりに重たい荷物を抱え、フラフラになりながら家に戻った。
早速セッティング。
タッチパネルディスプレイは正面に、今まで使っていたものは、その右側に少し斜めにして置いた。
さて、改めてネットにつないで動作確認。
うむ。
問題ない。
俺はタッチパネルとコントローラのダイレクト命令の設定をした。
沢山の命令をダイレクトに登録できるようになったので、俺はある細工をしておいた。
それに関しては後に語るが、命令の暗号化だとだけ言っておこう。
登録と設定は夜までかかった。

## 補給くん２号

次の日、ＮＰＣのＡＩを眺めていたら、ＮＰＣメカニックキャラの松島が、弾幕用砲塔群の完成を報告にきた。
しっかり説明を書いていたせいか、それともさほど強力では無いからか、思ったより研究費は安くあがった。
ふふふ、これで俺の旗艦が完成するかもしれない。
まずは弾幕用砲塔群パーツの説明を読む。
運用には艦長のレベルが結構必要だ。
まあでも、サイファには問題なし。
制作には、高いメカニックのレベルが必要で、失敗の可能性も有り。
値段は通常の弾幕用砲塔群パーツよりも若干高い程度だ。
後は設定方法など見たが、特に問題はなし。
ふむ。
俺は早速作成。
作成中は、やる事がないので別の事をしていたが、リアル時間で１５分でできあがった。
さてとりあえず付けてみた。
おお～
って、見た目は今までとあまりかわらない。
特に重量負担もない。
後は実際にうまく動くかどうかだ。
俺はドックから出し、宇宙空間へと出した。
この領域では攻撃はできないが、テストはできる。
おれは正常に発射されるか試した。
うむ。
前、後ろ、右、左、上、下、自由自在だ。
俺は上機嫌でドックへと戻した。
さて、後は武器だが・・・
コレが問題だ。
俺は今まで攻撃をほとんどしたことがない。
だから攻撃武装の経験値が少ないのだ。
武器をつけたとたんに、この補給戦艦の能力は激減するはずだ。
とりあえず、ミサイルを武装してみた。
やはり、かなり下がってしまう。
取り外した。
同じ事を何度もやってると、徐々に機体を傷つけて、能力が下がる事がある。
同じ事はあまりできない。
どうするか。
結局補給くん号よりちょっぴり強いので我慢するのか。
いや、それでもかなり強いけど、せっかくこれほどの物が、ココまで順調にできたのだ。
俺は考えた。
と、ふと思いついた。
友達。
リアル友達が何人もこのゲームをしている。
まあ、真面目にやってる奴は２人しかいないが、ひとりは完璧な攻撃タイプ。

最近見かけないが、俺はそいつに電話をした。
　達也「もしもし、達也だけど。」
　正春「あーどした？」
　達也「絆やってるか？」
　正春「いや、ちょっと仕事忙しかったから、やってね。」
　達也「あれ？今日は仕事は？」
俺は今日が平日だと気がつき、疑問に思った。
　正春「ああ、やめた。俺も達也みたいにニートやるは。」
　達也「おいおい。それで絆するのか？」
　正春「これからはやりまくりだぜ！」
うむ。
なんとなく正春のやる気が伝わってきた。
達也「じゃあさ、ちょっと頼めねぇか？そっちに艦船１隻譲るから、それに武装して返してくれね？」
そうだ。
俺は武装部分だけ、得意な奴に頼む作戦にでたのだ。
って、普通にみんなやってる事だけどね。
　正春「ああ、いいよ。俺宛てに１ドルで売りにだしといて。」
　達也「おけ！」
電話を切ってから売りに出すと、すぐに正春が買いとった。
更にしばらくして、俺の期待の艦船は戻ってきた。
その時に、お礼に補給艦１隻と、制作可能になった弾幕用砲塔群をプレゼントした。
正確には、１ドルで売りに出して、買いとらせたわけだが。
するとすぐに、正春から電話がかかってきた。
　正春「ありがとう。これすげえな。俺もコレを元に旗艦作るぜ。」
　達也「もしかしたら俺のよりもつええのできるかもな。」
　正春「おう。じゃあまたゲーム内で。」
　達也「うい。あ、そうそう、俺、そろそろ軍を立ち上げるかもしれんから、そん時はきてくれ。賞金は３０％で。」
　正春「ほう。とうとうやるか。まあそんときは。」
そう言って俺達は再び電話を切った。
さて、俺は期待の艦船を調べてみた。
驚きだ。
強すぎる。
攻撃はまあ、補給艦だけど一応ついていると言った感じだが、スピードがスゴイ。
結局ほとんど落ちる事なく、通常の高速戦艦よりも速い。
装甲は最低だが、弾幕は３６０度サポート。
そして補給艦としても最高レベル。
ほぼ理想どおりの補給戦艦が完成した。
　正春「よし！」
俺は早速旗艦の変更を行った。
名前はどうすべ・・・
俺は良い名前が思いつかず、結局「補給くん２号」にした。

## サイファ軍始動

俺は、軍を立ち上げる決意をしていた。
このところ、リアル友達の「正春」のキャラ「ＬＯＶＥキラ」も復活して頑張っているし、もうひとりのリアル友達「真」のキャラ「真でれら」も見かけた。
俺は２人に招集をかけた。
とりあえず、拠点の無い義勇軍を立ち上げ、どこかを取りに行くのが良いだろう。
軍が統一を果たした時の報酬の割り振りは、俺が４０％、正春と真が３０％に設定。
俺が多いのは、俺が大将だからではない。
今後仲間を増やすのに１０％を使うため。
ドンドン設定してゆく。
そして全ての設定を完了した。
俺にとっては半年ぶりの軍。
ソロでやる時と違って、別艦隊への命令形コマンドの設定が必要だが、それはおいおいやるとしよう。
とりあえずは、早急に本拠地がほしい。
俺は地上戦は苦手なので、有人惑星はまず除外。
移動要塞は魅力的だが、この戦力ではまず勝てないだろう。
コロニーか、要塞か。
守りは要塞のが良いが、コロニーの生産性は魅力だ。
　サイファ「コロニーか要塞、どっちがいい？」
俺は友達の意見を聞いた。
　真でれら「コロニーで守りやすそうな所が有ればそこがいいな。」
　ＬＯＶＥキラ「守りやすそうな所を盗るのは大変そうだけどな。」
　サイファ「じゃあそこそこ盗りやすいコロニーあたりか。」
　真でれら「まあ、妥当だね。」
　ＬＯＶＥキラ「自作要塞って手もあるけどね。」
そう。
要塞に限り、拠点の無いマップに要塞を作る事が可能だ。
メリットは、簡単に拠点を手に入れられる。
しかし、莫大な金がかかるし、拠点レベルも最低からのスタート。
手に入れられるなら、奪った方が良いだろう。
　サイファ「やっぱとりあえずはコロニーだな。」
　真でれら「で、何処が良い？」
　サイファ「ソロ軍の拠点で、守りやすそうな所、どっかあるかな？」
　ＬＯＶＥキラ「ん～何カ所か有るな。」
　サイファ「マップ右側であるか？」
　真でれら「なんで右側？敵は左のが多いでしょ？」
　サイファ「だからだよ。しばらくは国力増強したいし。大きなところから攻められるのは避けたいからな。」
　真でれら「なら、右端の第１３コロニーは？あそこは回廊になってて鉄壁でしょ？」
　ＬＯＶＥキラ「鉄壁過ぎて勝てないって。」
第１３コロニー。
そこはとったもん勝ち的なくらい、守りやすいマップになっている。
もちろん、ちゃんと準備していればだが、本拠地にしている「薔薇の貴公子さん」は、きっとしっかり守っているはずだ。

それなりに名前が有名なプレイヤだから。
ソロでずっと守り抜いてるんだから、いわずもがなだが。
　サイファ「ん～でもあそこは本拠地にはいいなぁ。ちょっとマップデータ拾ってくる。」
俺はそう言うと、ネットでデータを探した。
馬鹿だとは思うが、多くの人が功績をひけらかしたいのか、こういった重要な物がネットに出回っている。
対戦の映像なんかも有り、俺はそれで対戦を研究していた。
　サイファ「拾ってきた。」
俺は友にそういうと、しばらくマップを見つめた。
回廊を迂回する事は、不可能そうだ。
先日ジークに負けた所も似たようなマップだが、迂回できるし、回廊の幅も安定しているから、攻略難易度は全く違う。
　サイファ「問題は、この細くなっていきなり広くなってるところだな。」
　真でれら「ああ。そこの出口で集中砲火されたら、抜けられる艦船は皆無じゃね？」
　ＬＯＶＥキラ「それにマップの端だから、長期戦もきつそうだな。」
　サイファ「いや、それはほら。俺がいるから大丈夫でしょ。」
　真でれら「長期戦でいいなら、俺がココで削ってやんよ。」
　ＬＯＶＥキラ「正面さえ削れたら、俺が突破できるな。」
　サイファ「うし。じゃあ作戦を決めよう。」
こうして俺達は、少しばかり作戦を考えて、サイファ軍最初の戦闘へと向かった。

マップに到着すると、真でれら部隊を先頭にＬＯＶＥキラ、そして俺と行軍する。
問題の回廊に入る。
まだ敵影は無い。
でも、必ず出口に敵がいる事を確信していた。
　真でれら「いたいたー」
その言葉を受けて、情報がこちらにも届く。
やはり予想したとおりの配置だ。
作戦どおり、回廊の中から真でれら艦隊が、正面の敵を攻撃する。
向こうも反撃してくる。
ＬＯＶＥキラはタイミングを逃さぬよう待機。
俺は補給と守りで支援した。
　真でれら「やたら堅いんですけどぉ～」
確かに、やたらと守りが堅い。
真でれらは守り特化の育てかたをしているから、鉄壁に守りながら少しずつ削る予定だったのだが、その守りは互角にみえた。
　ＬＯＶＥキラ「ＣＰＵじゃね？」
　サイファ「そっか！」
ＣＰＵ。
それは、プレイヤがネットに接続していない時、代わりに守りをしてくれる人工知能。
あらかじめ行動を登録しておけば、そのとおりに対応してくれる。
プレイヤがやるより、対応が単調になり弱くなってしまう傾向が多いシステムだが、それをカバーするシステムも取り入れられている。
まずは防御力が通常の１．３倍になる。
これはかなりのもので、その為今こちらは苦戦しているのだ。
他にも、こちらの行動に対しての反応が、ノータイムで行われる。

たとえば、敵が陣形をＩ字陣形に変更してきたら、こちらはＵ字陣形に変更する命令があったとしよう。
われわれプレイヤは、相手の陣形の変化を見て、予想して、対応を考えて、行動する。
しかしＣＰＵは、その命令がでた瞬間対応するので反応が馬鹿早いのだ。
これは、スピードが大きなメリットになるこのゲームでは、大きなアドバンテージ。
更にＣＰＵのメリットは、旗艦が破壊されてもレベルが半分になる事は無い。
まあ、気がついたら死んでて、更にレベル半分ってのはあまりにもひどいからね。
でも、破壊されたものは破壊されるし、失ったものは失われるけど。
でだ。
初心者から中級者くらいまでは、自ら戦闘するよりも、うまい設定さえすればＣＰＵのが強いのだ。
　真でれら「しんどいな。」
このままでは、いずれ補給物資が尽きて、撤退せざるを得ない。
　サイファ「出た所、上下はどうなってるかな？」
　真でれら「出たら上下使えるな。」
　サイファ「じゃあ俺もフォローするから、正面でて１０秒絶えてくれん？」
　真でれら「１０秒ならいけるかな。」
　サイファ「で、その隙にＬＯＶＥキラが回廊を出て上でも下でも、一気に突破。」
　ＬＯＶＥキラ「俺やばくね？」
　サイファ「それも俺がフォローする。」
　ＬＯＶＥキラ「ふむ。」
　サイファ「その時、敵がどっちを攻撃するかわからんけど、どっちにしてもどちらかに攻撃するはずだ。」
　真でれら「まあそうだろうな。」
　サイファ「攻撃がＬＯＶＥキラに行ったら、俺と真でれらで総攻撃。ＬＯＶＥキラはとにかく全速前進で。」
　真でれら「逆なら？」
　サイファ「しばらく絶える。それが１０秒。ＬＯＶＥキラはその間にＵターン。旋回はそれに反応して攻撃する場合があるから無しね。」
　ＬＯＶＥキラ「だろうな。」
　サイファ「で、背後を突けば、ＣＰＵだしもう対応できんでしょ。できればＬＯＶＥキラに攻撃が行けば良いけど。（笑）」
俺達の作戦は決まった。
少し被害がでるが、勝てるならこれくらいなんとも無い。
作戦は早急に決行された。
まずは弾幕を３方向カバーした。
真でれら艦隊が前進する。
３方向からの攻撃が襲う。
それらは弾幕に当たり爆発する。
　真でれら「きつ」
ＬＯＶＥキラが即行で回廊からでると、やや上に直進、正面の敵回避。
敵の攻撃はそのまま真でれらへ向けられていた。
　サイファ「少し我慢」
俺はタイミングをはかりつつ弾幕を張った。
作戦はうまく進んでいた。
しかし。
　ＬＯＶＥキラ「正面に敵！」

予想していなかった。
こうやって無理に突破した敵を、回廊内で確実にしとめる。
今思えば当たり前の陣形。
なめていた。
俺は自身の艦隊も前進させた。
　サイファ「キラはそのまま正面の敵突破！」
　サイファ「真はキラの後ろにつけ！」
返事は無かったが、それぞれが命令どおりに動く。
俺は３方からの攻撃に絶える。
　サイファ「真は奥の敵と対峙」
　サイファ「キラは後ろを」
さて・・・
俺は第二戦艦を左に向けていた。
一撃必殺！
俺はチャーリーに一斉攻撃を指示した。
一気に左側の艦隊が弱まる。
しかしすぐにこちらの攻撃も弱まる。
　達也「あくまで一撃必殺。」
それでも左からの攻撃が弱まり、弾幕を正面と右に集中させられるのは助かる。
　達也「きつい戦いだなぁ」
ＬＯＶＥキラが後方の敵を一掃したようだ。
そのまま正面の背後を突く。
真でれらは右回りでＵターン。
そろそろ限界。
俺は艦隊をそのまま下げた。
正面の敵艦隊は、ＬＯＶＥキラに背後をつかれボロボロ、右側の敵艦隊は、俺という攻撃対象が消えた事で、旋回してＬＯＶＥキラを攻撃し始めた。
しかし戻ってきた真に側背をつかれて、一気に戦力を減らした。
勝ったな。
俺は隊を立て直して、残党狩りに出た。
敵旗艦はコロニー近くにいたが、あっさりと破壊した。
なんとか手に入れた、初めての拠点だったが、勝利というにはあまりにも被害が大きかった。
突破につき合った補給艦もボロボロだもんな。

# 新規要塞

しばらく俺達は軍を立て直していた。
コロニーは思った以上に生産性が高く、金には困らない。
成長性も成長余地もまだあるし、４大勢力のどれかが全軍で攻めてこないかぎりはなんとか守れそうだ。
薔薇の貴公子ひとりでも、あれだけの守り。
俺らはその守りにいくつか変更点をくわえて守りを更に固めた。
文句の無い本拠地になりそうだった。
いや、ひとつ文句があるな。
中立ドックから遠いから、新規兵器の移動がしんどい。
コロニーのドックが充実するまでは、しばらく我慢だった。
で、１週間。
俺の部隊も、軍も、全てが一通り完成した。
まず、大将は「サイファ」。
中将に「ＬＯＶＥキラ」と「真でれら」。
守り専用の艦隊を率いるのは、ＮＰＣ３人。
それぞれの持つＮＰＣのナンバーワンを集めた。
全て准将。
少将は、今後プレイヤの仲間ができた時の為にあけておく。
それ以外にもＮＰＣそれぞれ１人を准将にして、艦隊を動かせるＮＰＣをキープ。
拠点ひとつでこれだけの将官が設定できるのは、このコロニーの生産性の高さのおかげだ。
後は参謀もそれぞれ１人設定。
それ以下はそれぞれが好きに設定した。
ココで俺の３艦隊を紹介しよう。
あまり複雑な名前はややこしくなるので、俺は第一艦隊、第四艦隊、第七艦隊と名付けた。
友達の艦隊はもちろんそれ以外の数字ね。
第一艦隊は、旗艦が「補給くん２号」で、搭乗員はもちろん俺「サイファ」と参謀「ロバート」。
ロバートは攻撃力に優れた参謀で、俺の苦手な部分をフォローしてくれるはずだ。
戦艦は３隻で、２隻は護衛艦。
それぞれ「ロイ中佐」と「マサユキ少佐」。
同じ階級にしないのは、命令系統で混乱を防ぐ為に必要だ。
特に同じ部隊では。
２人ともバランス型のハイレベルキャラだ。
で、残りの１隻が高速戦艦で「チャーリー大尉」。
補給戦艦が９隻で、うち６隻は直属艦船。
指揮は「艦長Ａ」って事になるのかな。
直属艦船の力は、指揮官の力の７０％程度の力となる。
残り３隻は、「ロベルト大佐」「トゥーリオ中尉」「チャン少尉」。
皆、俺が補給特化で育ててきたやり手艦長。
ナンバーワン補給を助けてくれる。
この艦隊をトータルで説明すると、持久力有り、スピード有り、反応早く、艦隊運用はうまい。
通信回線レベルをワンランク下げる事で、盗聴の危険はあるが連絡は早い。
まあ盗聴に対しての対策もばっちりなので問題なし。
補給は超早く、攻撃を防ぐ事にも優れている。

欠点は攻撃力が瞬間的には強いものの、通常は弱い。
装甲は薄いので、被弾した時はもろく、システムが複雑なので多くの艦船を率いる事には向かない。
多くを率いる時は、各艦長の裁量に任せる事になるだろう。
とまあ、欠点は限りなく完璧な欠点だが、それは俺が頑張ればなんとかなるだろう。
後は経験の中で調整していくだけだ。
次に第四艦隊は、本拠地を守る艦隊だ。
友達の第五第六艦隊と共に、回廊の出口を固める。
通常は二次元的に部隊配置するが、プレイヤが３人いるから上下もカバーできる。
俺の第四部隊は、上部を担当だ。
真の第六部隊が基本エリアを担当。
何せ守りだけなら相当強いから、敵の攻撃にさらされる部分を受け持ってもらう。
下方はキラの第五部隊。
下への攻撃はかなり難しいから、ディフェンスの弱いキラには良い。
突破する時上方を選ぶのは、そう言った事が関係している。
と言っても、プレイヤの多い軍を相手にするなら、上方が空いている保障は何処にもないけどね。
まあ、最初からココを攻略できる奴なんて皆無だろうな。
で、２回目には持久戦でくるか、それとも中央突破かになるだろう。
上や下に突撃する選択肢は、俺が敵ならまずごめんだ。
なんにせよ、納得な守りができた。
第七艦隊は、第一艦隊のＮＰＣによるコピー艦隊のような感じだ。
旗艦は「補給くん号」で、第一艦隊よりスピードと補給機系は若干落ちるが、装甲と攻撃力を上げてある。
そうそう、狙っていたわけでは無いが、俺達３人は運良く、それぞれの特化キャラを育てていたから、艦船作成の際みんなで協力してやることにした。
更にはＮＰＣもトレードしたから、友達２人も近場で短時間なら、俺の補給が無くてもかなりやれる状態になった。
とはいっても、近場に現在敵認識している相手はいない。
中立のシリウス要塞から攻撃にでれれば良いのだが。
要塞以外の本拠地を持った軍は、中立要塞や地球での物資購入には、デメリットが出てくる。
物資購入とはエネルギやミサイル、食料を購入して補給艦や艦船に補給する事だが、自軍拠点以外でそれを行うと、国力が下がるのだ。
買うなら自国の生産品を買えと、まあそういうことだ。
ちなみに要塞は生産できないが蓄える事ができる。
しかし中立の要塞は共用なのでそれはできないので、事実上中立要塞からの出撃は不可能になっていた。
さて、当面我らがサイファ軍の目標は、遠征しやすい場所に砦を作るか、それとも奪うかになる。
マップ下にはまだ敵対していない「炎のドラゴン軍」がかなりの戦力だが、まだ敵対するには早い。
左と上にかけては、中小の軍が点在しており、攻略するならこの中から攻略対称を探すのが良さそうだ。
しかしどちらも少し離れているから、左上中間地点に要塞を作る事にした。
まずは輸送艦を作成。
完成までに必要な物資に目処が立つまで、数日を要した。
作成場所は３人で決めた。
特に良いマップとは言えないが、何もない見通しの良いところを選んだ。
小細工や戦術があまり必要なく、数が物をいいそうな戦場。
周りの軍の規模を考えての決定って事だ。

全てを決めて作成を開始した。
ここから完成までの、リアルタイムで約４時間は、３人で領域を守らねばならない。
輸送艦への攻撃、制作中の要塞の破壊、それらを狙っているプレイヤがおそらくいるはずだ。
一応ゲーム人口の少ない平日の昼過ぎを狙ってやってはいるが、俺たちみたいなニートは、全国に大勢いる。
３時間半が過ぎた頃、やはり攻撃を仕掛けてきた。
この完成に近い時間に攻めてくるのは、被害が大きいから当然の時間だ。
攻撃してきたのは、要塞を作成してる位置から、一番近い所に軍の拠点要塞を持つ、紫苑軍だ。
作成中の要塞は、友達２人が守っている。
俺は状況を通信で聞いてるだけだ。
　真でれら「敵は紫苑軍四天王のうちの２人、紅蓮と麒麟だな」
　サイファ「今こっちは輸送船護衛しながら向かってるけど、どうだ？大丈夫か？」
　ＬＯＶＥキラ「ココだとどうしても削りあいだな。ちょっときつい」
　真でれら「一応名前聞いたことある相手だからな」
　サイファ「後５分でそっちにつきそうだけど、耐えれるか？」
現状ややおされ気味のようだが、俺が到着すれば数的優位になる。
　真でれら「俺はいけるけど、キラがきついかもな」
　ＬＯＶＥキラ「こっちは瞬発力勝負じゃ。守りなんてー！！」
　サイファ「なんとか絶えて、ポジション調整頼む」
　真でれら「まにあうかな。キラは外周頼む」
俺が頼んだのは、我が艦隊が到着した時、攻撃しやすいところに敵を誘導しておいてくれということだ。
まあ、そう簡単にはいかないだろうが。
最悪守り抜いていれば問題ない。
輸送艦の動きに合わせるのはじれったかった。
なかなか進まない。
　サイファ「どうだ？」
　真でれら「後２分あればなんとか」
　ＬＯＶＥキラ「こっちは２分もたねえかも　泣」
このまま進めば丁度２分後に到着しそうだ。
しかしキラが崩れると、元も子もない。
俺は輸送艦に先行するかたちで２人の元に向かった。
ココまでくれば大丈夫だろ。
そして１分１０秒後、敵影を捕らえた。
直ぐに後ろを取れる位置では無いが、側面は捕らえた。
一斉攻撃。
攻撃力の低い我が艦隊でも、それなりにダメージを与えたようだ。
　ＬＯＶＥキラ「俺は一旦再編」
　サイファ「真は頭押さえて！後ろを狙う」
　真でれら「おけ」
敵軍は弱くなった前方の突破にかかる。
予想どおり。
俺の艦隊の攻撃力なら、背後をとられても大丈夫だと考えたのだろう。
それともスピードについてこれないと判断したのか。
ようは補給艦の多い艦隊を無視してなめきっているのだ。
真は押さえつつゆっくり誘い込む。

俺は簡単に背後をとった。
後は俺の得意な戦法だ。
　達也「チャーリー大尉ゴー！！」
強力な一撃が敵を襲う。
敵の補給艦群が全滅だ。
部隊再編をしていたキラも再び攻撃に出る。
俺も第七部隊を突撃させた。
　達也「いけいけベッカム准将！」
後は楽勝だった。
まあ３対２だし、艦隊数も６対５だし、敵は俺を無視したし。
毎回の戦闘で思うのだが、補給艦の多い艦隊は、敵の油断を誘えて良いなと思った。
まもなく紫苑軍の艦隊は撤退を始めた。
　ＬＯＶＥキラ「追撃するか？」
　真でれら「いや、俺らも結構やばいし」
友達の第二、第三、第八、第九艦隊は、これ以上の戦いは無理なくらい傷ついていた。
それにしても、四天王の２人だけしか攻めてこなかったのは助かったな。
おそらくはこの時間だから、出撃できるのが２人だけだったのだろう。
まあ、作戦勝ちといえばそのとおりだった。
まもなく要塞は完成した。
これでココに艦隊と物資をおける。
まだできたばかりで、戦力としては期待できない要塞だけど。
さて、俺はできたばかりの要塞に入港しようかと、椅子にもたれかかっていた体を起こした。
その時、左に機影が見えた。
　達也「なんですとぉ！」
新たな敵だ。
このタイミングで来たということは、出来たばかりの要塞を奪いにきたか、それとも戦いの後弱ったところを狙ったのか。
おそらく両方だな。
俺は苦笑いしながら、敵軍を確認した。
ソロの在野軍、「薔薇の貴公子軍」だ。
先日の復讐か。
まあいやなタイミングで嫌な敵だ。
友達２人は要塞に入港しようとしていたので、敵に背を向ける形だし、距離はあるが俺の左から来る形だ。
俺は進路左で全速前進。
おそらく１０秒後に正面衝突予想。
　サイファ「ふたりは前進、進路は左。旋回はするな」
　ＬＯＶＥキラ「うげ」
　真でれら「おけ」
予想どおり正面からの衝突だ。
一戦した後だけに、かなりきつかった。
真っ向勝負だとやばいな。
アレを試してみるか。
失敗するとかなりきつい事になるだろう。
もしかしたら全滅するかもしれない。
まあ、死ななければいいか。

俺は試す事にした。
戦闘中も友達からの通信は入ってきていた。
　ＬＯＶＥキラ「やばいよ」
　真でれら「まにあわねぇ。がんばってくれ」
俺は通信回線を一番緩いのに変更した。
こちらの通信は、敵に傍受される確率がもっとも高くなった形だ。
後は相手が諜報活動をきっちりしてくれている事を祈る。
相手はなかなか出来る、薔薇の貴公子さんだ。
きっと傍受してる。
俺は第七艦隊のリヒタルゼン中尉に、Ｉ字陣形にして突撃命令を出すと、直ぐに本体を丼型陣形（俺オリジナル）に陣形を変更させた。
すると通信記録に
　サイファ「Ｉ字陣形にて突撃！」
とでた。
コレは俺が前に、傍受対策として行った、攪乱システム。
暗号命令としても使う人がいる方法。
今俺が「Ｉ字陣形にて突撃！」といえば、それは「丼型陣形にて敵を包囲！」となるのだ。
しかしコレを見た相手はどう思うか。
どう行動するか。
一応フェイントでリヒタルゼン中尉を突撃させている。
護衛艦だから、何とか死なずに帰還してくれるだろう。
それを囲むように、相手陣形が変わる。
Ｕ字陣形に変更したようだ。
そしてそれを囲むように、俺の艦隊は相手を包囲した。
良し！
突破を達成したリヒタルゼン中尉はずたボロで、まっすぐ航行することもできないくらいやられていたが、俺の主力艦隊は敵の背後からどんどん敵を殲滅していった。
気がついた薔薇の貴公子さんは、艦隊をクロスさせて正面対決の形をとってきたが、時既に遅し。
補給もそろそろきつそうで、みるみる弱ってゆく。
こっちは物資による能力低下は全くない。
決着はついた。
さて、問題は薔薇の貴公子さんの旗艦だが、逃げるのも諦めたのか、通信要請がきた。
俺は攻撃をやめて回線を開く。
　薔薇の貴公子「逃がして！（笑）」
最後の交渉にきた。
俺は返事を返す。
　サイファ「条件次第ｗ」
　薔薇の貴公子「なに？」
　サイファ「こっちの軍にはいらねぇ？」
別回線から、「無理だって」と友達からの通信が入ったが、意外にも好感触だった。
　薔薇の貴公子「報酬は？」
　サイファ「少将で１％」
　薔薇の貴公子「よろしく」
交渉はあっさり成立した。
軍を抜けられる心配はもちろん有る相手だったが、裏切りに関してはデメリット大きいから、大丈夫だろう。

あのジークの反乱が成功して、ゲーム調整が入った。
だから今は反乱をしようなどと思う奴はほとんどいない。
やるのは馬鹿だけ。
反乱したら、まず全ての軍と敵対関係になる。
成功率も大幅に下がり、全てを完璧に準備しても、成功率は１％もない。
さらに反乱を起こした場所のみを得て、他は全て一旦中立になる。
まあとにかく、使える仲間が増えた。
接近戦と地上戦が得意なバランス型プレイヤのようだ。
レベルは友達２人より上だった。
第十から第十二艦隊を任せ、本拠地の艦隊の再編を行った。
第五、第六、第十一艦隊で回廊出口と直ぐ後ろを固め、更にその後ろを第四艦隊が守る鉄壁の守りが完成した。
まあ、自分で言ってるだけだけど。
新要塞の名前は、甲羅要塞にした。
防衛責任者は「真でれら」にして、甲羅艦隊を新設した。

# 打倒ＮＰＣ３大勢力

ココ１週間は、しょっぺえ戦闘を繰り返していた。
絶対勝てっこない戦力で攻めてくる。
昨日なんか、株のデイトレをしてたら突然攻めてきやがって、数十万円の損失がでちまった。
戦闘中に、銀河ゲームオンライン会社の利益予想が下方修正とかでやがるし、もう大変だ。
ちなみにこのゲーム内で株取引できるのだが、ゲーム内の証券会社に行かないとダメだ。
戦闘中は取引できないのだ。
まあ話がずれてしまったが、ここのところ、無駄な戦闘が多い。
そろそろＮＰＣキャラが、軍を率いるのに無理がでてきたのだろうか。
最近はＮＰＣキャラの軍から抜ける人も多くなり、戦力はあるけど人材が足りない状態の３大勢力。
てか、ジーク軍が、風の魔人軍を飲み込む勢いだ。
氷の虎軍や炎のドラゴン軍に、正面から挑んで善戦している軍も見かける。
近いうちに勢力図が大きく変わる予感。
何もしていなかった気分の我が軍ですら、新たにプレイヤが２人入ってきていた。
俺とジークの元で共に戦っていた「今日子」さんと、昔「真でれら」と双璧と言われた「キャンサー」さんだ。
まあ双璧って言ってたのはうちわだけどね。
これでまた軍は大幅再編を行った。
更に１週間、みんなでとりあえず、ＮＰＣ勢力を全滅させようと、暗黙の協調がでてきていた。
全体マップ下方では、炎のドラゴン軍と沢山の軍の連合で、大規模に開戦していた。
我々はこのチャンスを物にするため、上から赤の領域に入る。
確実にひとつずつ拠点を手に入れていった。
もちろん我々だけではない。
他の軍もドンドン勢力を伸ばす。
こんなにマップに変化が見えるのは初めてだ。
赤い点、青い点、黄色い点が、リアルタイムで減っているのがわかる。
その中で卵色の点が、一番勢いよく増えている。
ジークの軍だ。
左下を埋め尽くしてゆく。
左上では、グリード軍がなかなかの勢力になっていた。
マップ上の青い点は、左右下からいろいろな色の光に飲み込まれるようだ。
マップ右の我が軍の赤紫色の光の点も、それなりに下へ広がっていった。
しかし重い。
みんなこの機会を逃さぬよう繋いでいるから、反応が少し悪くなっている。
でもまあ、細かい戦術が必要な戦いは、今はなさそうだけど。
日曜日は朝から晩まで戦いが続く。
俺の場合平日も夜中もだけど。
１日の睡眠時間が毎日数時間だ。
金儲けも最近は適当だ。
この機会を逃したくない奴が、馬鹿みたいに買ってくれるので、利益は上々だった。

１ヶ月そんな状況が続いたが、ここにきて膠着状態に陥った。
それぞれのＮＰＣ勢力の拠点が少なくなり、戦力が集中した。
それが原因で、だれもが攻めあぐねていた。

左下の風の魔人軍は、ジーク軍の領域が取り囲み、持久戦でゆっくり削っているようだ。
おそらくそこは後数日から数週間のうちにジーク軍のものとなろう。
２年以上に渡って維持していた力のひとつが、もうすぐ消える。
氷の虎軍は、紫苑軍やグリード軍と常に開戦し、勝ったり負けたり。
しかしこちらもそんな中で、徐々に戦力を減らしていっているように思われた。
問題は、炎のドラゴン軍。
この周りは、小規模な軍が腐るほど有ったが、中規模レベルが無く、徐々に戦力を盛り返してるように見える。
我が領域の左側を埋める、今や大勢力の「夜露死苦」軍が遠征してはいたが、大した成果は無かった。
どうすっか・・・
俺は考えていた。
この１ヶ月に盛り上がった、ＮＰＣ軍の殲滅。
それの終演はまもなくだ。
終われば当然プレイヤ同士の戦いが始まる。
今や我が軍は第８位の勢力になっていたが、近くに夜露死苦軍と紫苑軍が存在し、どちらも我々の戦力を上回る。
既に紫苑軍とは敵対関係だから、このイベントの後にはぶつかる事間違いなし。
これで夜露死苦軍まで敵に回すことになってはやばいから、それは避けねばならない。
俺達は相談した結果、夜露死苦軍と不戦協約を取り付けるか、もしくは軍事同盟を結ぶ事に決めた。
俺は早速夜露死苦さんを検索する。
すぐにみつかった。
俺は通信を試みた。
軍の大将同士は、それぞれの領域に接点がある場合、オンライン状態でなおかつ戦闘中でなければいつでも通信ができる。
ちなみに同じ軍の仲間どうしなら、いつでも通信できるのは言うまでもない。
夜露死苦さんは通信を許可してくれた。
　サイファ「はじめましてヨロシクさん」
　夜露死苦「ういっす！」
　サイファ「今炎のドラゴン軍攻めてますよね？手伝いましょうか？（笑）」
　夜露死苦「むむ！狙いは何ね？」
　サイファ「協定結びません？そろそろＮＰＣ軍は全滅でしょ。その後の事考えて協力しませんか？」
　夜露死苦「おけ！期間は？」
あっさりと了承してくれた。
まあ夜露死苦軍は、我々より敵対してる相手が多そうだし、隣接している大勢力もいくつか存在するから、向こうも協定か同盟は考えていたのだろう。
　サイファ「期間設定じゃ無くて、状況設定でもいいかな？」
協定や同盟を結ぶ時、リアル時間で１週間から１年とか１０年とかで結ぶ事ができる。
それ以外に、軍の数による設定や、それぞれの軍の勢力による設定でも期間を決める事ができた。
　夜露死苦「いいけど」
俺はお互いが納得できるであろう設定を提案した。
　サイファ「どちらかの軍の隣接軍が、お互いだけになるまで。」
これは、攻め込める敵、正確には攻め込むに無理が無い敵が、お互い以外に存在しなくなったら協定解消というものだ。
うまくやれば、お互いだけが残るまで協定関係も続けられるし、相手の周りを押さえて終わらせる事も出来る。
後の方法に関しては、マップ端に位置する我が軍より、夜露死苦軍の方がやりやすい。

条件としては夜露死苦軍の方がやや有利な協定。
地理的優位がある我々が、協定を結ばせるには、それくらいの利点は掲示しなくてはならないだろう。
夜露死苦さんは少し考えてから、不戦協定に同意してくれた。

協定に同意してくれたお礼として、当初から言っていた、炎のドラゴン軍殲滅戦に同行する事になった。
俺は誠意を見せる為、「サイファ艦隊」を参戦させた。
サイファ艦隊は、元第一艦隊と第七艦隊を合わせた艦隊で、俺の旗艦艦隊だ。
部下は「ＬＯＶＥキラ艦隊」「今日子艦隊」や、最近仲間になった何人かをつれていった。
　サイファ「キラ、無理せんでもいいよ」
　ＬＯＶＥキラ「俺はいつでも突撃じゃ！」
　サイファ「死なないようにね。死んだら取り分半分だからな。」
　ＬＯＶＥキラ「それは痛いな。大人しくしてるよ。」
俺達、いや、主に俺は、夜露死苦軍の後方で補給活動にあたっていた。
まあそれだけで、前線で戦う夜露死苦軍の指揮は高く維持されるし、思い切りやれるのだ。
十分貢献できている。
１時間に１砦のペースで、攻略は順調た。
炎のドラゴン軍には、プレイヤが操作する艦隊の姿は無い。
接続していない、しばらくゲームを放棄しているプレイヤの艦隊が、ＣＰＵによって動かされているだけだ。
その中には、かつて名を轟かせていたプレイヤの名も見かけたが、今の俺達の敵では無かった。
てか夜露死苦軍のね。
そしていつしか、有人惑星のあるマップ攻略を残すのみとなっていた。

## 滅びから始まり

炎のドラゴン軍の砦がココだけになっても、これだけの抵抗が出来る事を考えると、この有人惑星の生産性はかなりあるのだろう。
正直ココが夜露死苦軍の領土になる事に抵抗があったが、まあ約束だから仕方がない。
それに惑星占拠の為には地上戦もあるから、自分でココをとるのは無理だし。
　サイファ「できるだけ宇宙空間で削ろう。俺地上戦苦手だし」
　夜露死苦「そなんだ。じゃあある程度削れないと勝てないかもな」
　サイファ「まあ一応サポートはするけど、それだけだから」
　夜露死苦「それだけで十分やん。なかったらここまでもこれなかったからな」
　サイファ「そういってもらえると手伝ってるかいがあるね」
炎のドラゴン軍、最後の砦への攻撃の前、俺達はリラックスムードで会話しながら、作戦確認をしていた。
連戦の勝利の中、目の前の事以外全てを忘れていた。
その時だった。
画面上部に臨時ニュースが流れた。
「風の魔人軍壊滅」
　サイファ「おお、ジークやりやがったか」
　夜露死苦「あそこ強いもんな。まあ時間の問題だったし。損失を極力減らす為に長期戦してただけだろ？勝つだけならもっと早かっただろうな」
　サイファ「だね」
俺達は、数週間かかるような長期戦なんて、悠長な事は言ってられない。
長期戦と言っても、せいぜい補給能力が尽きるまでの、数時間の長期戦くらいだ。
さて要塞での補給を終わらせると、俺達の行軍が始まった。

敵の最後のマップに入ると、すぐに敵艦隊と遭遇した。
　サイファ「なんだ？読まれてたのか？」
　夜露死苦「いや、艦隊が多いだけだろ」
そういや、ジークが反乱を成功させた時、１０００隻もの艦隊と対峙した時と似ていると思った。
まずは正面からの撃ち合い。
お互い削りあいだ。
コレをみて俺は、ジークが長期戦を選んだ意味が分かった。
　達也「まともにやれねぇじゃんこれ」
俺は援護についてきた事を少し後悔した。
でも後悔してばかりもいられない。
俺達はこの状況の中、何とか勝たないといけないのだ。
何故なら、今後ジークがプレイヤの軍へ攻撃をしかけてくるはずだ。
そう、もうプレイヤ同士の戦争は始まっているんだ。
ＮＰＣ相手にもたもたしていられない。
おそらくグリードとか紫苑も、氷の虎に向かっているじゃないだろうか。
動かない戦況を眺めながら、俺はそんな事を考えていた。
すると、突然敵の艦隊が理解不能な動きをした。
こちらと対峙しながらも、他に対応しようとしている感じ？
もしかしたら・・・
　夜露死苦「俺達だけじゃないみたいだな」

　サイファ「そらそうか」
ここが欲しいのは、俺達だけではない。
更には、炎のドラゴン軍を壊滅させて、一気に戦力を大きくしたい奴もいるのだろう。
残骸集めに来ている奴もいるかな？
この状況じゃそれは無理か。
そんな事を考えていると、状況が徐々に変わりつつある。
隙が見えた。
俺はすかさず命令を出した。
　サイファ「キラ、左から右に突入！」
　ＬＯＶＥキラ「ｏｋ」
　サイファ「今日子さんは左前方押さえて。俺はフォローする」
　今日子「やっと私たちの出番ねｗ」
　サイファ「正面の敵は俺達でやるから、ヨロシクさんは奥へどうぞ！（笑）」
　夜露死苦「いいのか？じゃあ」
俺達はこの隙を逃さなかった。
右側に逃げてくる何処ぞの軍の旗艦。
それに対応しようと、正面の艦隊が一部右に対応。
その背後を突くべくキラと今日子を突入させて、正面の艦隊をかき回した。
　達也「ちょっと俺がきついけど、この隙を逃したら罰があたるだろ」
正面の艦隊はしばらくして、その全ての機影を消した。
俺はついでに、逃げてきた旗艦を取り囲んだ。
通信を試みる。
相手も応えてきた。
　サイファ「仲間にならね？」
時間も惜しいので、俺は簡潔に伝えた。
　旗艦のプレイヤ「冗談！」
その言葉が返ってきた瞬間、俺は一斉攻撃。
相手は弾幕で守ろうとしたが、あっさりと旗艦を破壊した。
俺は、弾幕にどうしてもできる隙を見つけていた。
コンピュータゲームならではのバグ。
いろんな人の戦闘を記録した動画を見て、研究した結果見つけた。
うまく攻撃していると感心した映像には、全て共通点があった。
前方１０．２度からの攻撃と０度からの攻撃。
同時に行われた時に起こるミラクル。
俺はそれに気がつき、誰にも話す事なくこっそり艦隊設定に組み込んでいた。
多用するとばれる可能性もあるので、なるべく使わない。
今日はまあ急いでいたし、テストも兼ねて試した。
　達也「やっぱりいけるな」
俺は、実験台となり破壊された、名も無きプレイヤを放って、再び戦場に赴いた。
夜露死苦軍に合流した辺りには、他の軍もいくつか見られた。
どの軍も瀕死状態で、我々の敵ではないし、攻撃してくる事もなさそうだ。
ココでついでにやっておいてもいいが、時間も物資もおしかったのでやめた。
まあ彼らのおかげで、今我々が楽できるしな。
我々は、絶妙なタイミングで侵攻してきたようだ。
大量の雑魚軍と、炎のドラゴン軍が争い、両者が疲弊しきってるところにたまたま出合わせたのだ。
　ＬＯＶＥキラ「ひゃっほーい！！」

キラはイキイキと、縦横無尽に敵を破壊しまくっていた。
夜露死苦軍も確実に敵を破壊。
俺や今日子さんなんかは、戦闘よりも惑星への移動を優先させた。
惑星の側までくると、逃げる艦隊が集まってくる。
俺達は、弱った艦隊にとどめをさしていった。
宇宙の敵はあらかた片づいた。
いよいよ惑星に突入して、最後の仕上げだ。
惑星内では、キラよりも今日子さんのが前線に立つことになる。
俺達は艦隊再編を行った。
ちなみに今日子さんは、近距離戦と地上戦に強い。
ジークの元で共に戦っていた時は、人型乗りだった今日子さん。
あの時一度死んで、今ではもう乗っていないが、人型を極めし１人だ。
　サイファ「こっからは今日子さんよろしく。ヨロシクさんいつでもオッケーだよ」
　夜露死苦「さて、いくか」
俺達は有人惑星内へとマップ移動した。
地上戦は障害物が多いから、行軍は慎重だ。
スピード重視の俺の艦隊は、宝の持ち腐れ。
艦隊運営能力はあるから、移動だけなら楽勝だが、敵に接近されると地上戦はきつい。
人型１機でも、艦船が落とされる可能性もある。
人型が隠れてやしないか、慎重に慎重を重ねていた。
しかし、心配する事は無かった。
地上に残っていたのは、敵の本艦隊と逃げ延びたボロボロの艦隊だけだった。
今日子さんは能力を最大限に発揮して、艦船を次々と破壊した。
直ぐに決着はついた。
地上の本拠地を夜露死苦さんが落とした。
画面上に「炎のドラゴン軍壊滅」と表示された。
意外にあっさりと終わった戦いだった。
９時間後、「氷の虎軍壊滅」と表示された。
こうして、長きにわたって勢力を維持してきたＮＰＣ３大勢力は、時を同じくして滅びる事となった。

# 罠

ＮＰＣの軍が無くなって直ぐは、弱小軍が大勢力にドンドン滅ぼされていった。
しかしここに来て、それはすっかり止まり、ジーク軍を皆で打倒する機運がたかまっていた。
だれだかわからないが、情報操作の戦略を行っているようだ。
ネットのあらゆる「宇宙の絆」サイトの掲示板には、
「ジーク軍を、今みんなで倒さないと、ジーク軍に勝たれてしまう。」
とか
「力を合わせてジーク軍をうち破ろう！」
とか、まあ、弱小軍が自分の軍の勢力拡大の時間を稼ぐためにやった事だろうが、効果はあった。
弱小軍のほとんどと、一部の大勢力が、妥当ジーク軍のもとに集まっていた。
でもまあ俺達の領域は、ジーク軍の領域から離れているし、目の前の敵、紫苑軍とも一進一退だ。
そんなものに参加している場合ではなかった。
　サイファ「真、左よろしく。右から薔薇さんと今日子さんは大気圏突入しちゃって」
　真でれら「きついんっすけど」
　薔薇の貴公子「ホント大丈夫か？」
　サイファ「諜報活動に１週間かかったらなぁ。これで失敗したらお手上げ」
　真でれら「カニさんちょっとチェンジ」
　キャンサー「うむ」
今侵攻しているのは、クマクマ軍の本拠地、有人惑星パープルだ。
この領域では戦略の重要ポイントで、しかも生産性が高い。
ココをとれるかどうかは、我が軍の今後を左右すると言ってもいい。
　ＬＯＶＥキラ「又、紫苑軍きたよ。守りきれないかも」
別のマップで駐留していたＬＯＶＥキラからの通信によると、我が領域の最前線に紫苑軍が侵攻してきたようだ。
　サイファ「このくそ忙しい時に。マップの３時に星さんよろしく」
星さんは、正式な名前はスピードスターで、キャンサーさんとかの後に我が軍に入った仲間だ。
　スピードスター「了解♪」
援軍と言えば星さんで、とにかく航行速度には定評がある。
　サイファ「ココがある程度片づいたら俺も向かうけど、その領域はある程度頑張っても無理なら放棄していいよ。」
最前線でＬＯＶＥキラが守ってはいるが、紫苑軍の行軍を止める事はたぶん不可能だ。
だったら最初から放棄する事を頭に入れていれば、被害は最小、効果は最大にする事もできる。
まあもちろん、その領域は失う事になるけどね。
　今日子「ホントだ。中はガラガラだよん」
事前の諜報活動により、パープル惑星内の防衛が甘々なのは調べがついている。
もちろんそれは１００％ではないが、１週間の活動で限りなく１００％にしていた。
金も結構かけたしな。
　サイファ「オケ！じゃあ俺は一旦ココを離脱する。真、後は任した」
　真でれら「ああ、もう楽勝でしょ」
全ての敵を把握して戦況を見れば、後はもう時間の問題だとわかった。
俺は一旦最前線に近い要塞まで引き返した。
補給を早急に済ませると、ＬＯＶＥキラの援護に向かう。
　ＬＯＶＥキラ「もうやばいから引くぞ」
　サイファ「後少し我慢して。俺が行けば被害を最小限に押さえて逃がせるし」

最近は、少しでも被害を出さない戦いを心がけている。
いや、まあそれはいつもそうだったのだが、今はそれがとても重要な事になっていた。
生産性のある拠点が増えるより、仲間や艦船数の増える率のが高く、金がとにかく足りない。
多くの仲間のプレイヤを、高い階級に任命したいのだが、最近はそれもできない。
今では皆ひとり１艦隊が当たり前。
大将である俺だけが２艦隊を動かしていた。
俺がマップに到着した時には、ＬＯＶＥキラ艦隊とスピードスター艦隊の物資は、底をつきかけていた。
　サイファ「よし何とか間に合った」
俺は紫苑軍の艦隊背後をとった。
　ＬＯＶＥキラ「俺達は良いところで引くからな」
　サイファ「ごくろうさん」
敵は４艦隊で数も多かったが、後ろをとった我が艦隊は敵を次々と破壊していった。
　スピードスター「では♪」
味方はうまく戦域を離脱できたようだ。
後は適当に敵の被害を大きくして、ココを立ち去るだけ。
俺は撤退と攻撃のタイミングをはかった。
とその時、左に新たな艦隊の機影が見えた。
　達也「紫苑軍の伏兵？」
マップの隅に身を潜め、チャンスをまっていたのか？
しかも艦隊は「麒麟艦隊」だった。
俺はこれ以上は無理と、攻撃は諦め即時撤退へと移る。
進路は右から。
少し撤退には遠回りになるが、開いている道はそこしかなさそうだ。
　サイファ「伏兵してやがった。一応だれか近くまでお願い」
　スーパーモモ「私いくよ」
スーパーモモは、最前線の拠点に駐留している守りの得意な味方プレイヤだ。
　サイファ「おけ」
俺は、現在の戦況からつながる今後をシミュレートして、許可を出した。
マップを大回りする形で、俺は撤退する為に必要な場所に近づいてきた。
後ろから来る麒麟艦隊は、こちらのスピードにはついてこれないようで、少し引き離していた。
俺は安心して、椅子の背もたれに体をあずけた。
いや、正確にはあずけようと半分体を倒した時、正面に敵機影を見つけた。
それも尋常じゃない艦艇数だ。
　達也「勘弁してよ」
俺は既に遅いと思ったが、一応連絡を入れる。
　サイファ「手の空いてる者、スクランブルで４Ｄマップ３時に集合」
　真でれら「大丈夫か？」
　ＬＯＶＥキラ「なんかあったんだろ」
　今日子「逃げるの得意でしょ。何とかして」
　スーパーモモ「私でなんとかなるのかな」
みんなの通信が入ってきていたが、俺はもう通信の余裕は無かった。
麒麟艦隊を少し引き離していたのがせめてもの救いだ。
俺には若干の対応時間があった。
速度を落とし、更には逆進して右に旋回。
そしてすかさず全速前進。

麒麟艦隊の射程にはギリギリ入らなかった。
しかし前方の艦艇数の多さに、俺の対応も無意味に近かった。
　達也「くそ。こんなところで死ねるかよ。」
俺は陣形をＩ字陣形に変更。
もう突破しかない。
　スーパーモモ「きたよ。どうすればいい？」
　サイファ「１０時向きで待機」
俺はなんとかそれだけ伝えた。
　達也「うわ。紫苑の本艦隊かよ」
今向かい合ってる敵は、大将本人の艦隊だった。
俺はありったけの火力で突破をはかった。
先ほどの右に旋回した対応で、若干薄い場所への突入が出来そうだ。
俺はタイミングをはかりながら、弾幕を張った。
戦場を映し出すモニタは、炎と光に包まれていた。
今回のは完全に罠だな。
俺は苦笑いした。
最後逃げる時は、だいたい俺が後方を担当してきた。
今回も同じようにした。
毎回うまくいっていたので、油断していた。
しかし今更悔やんでもしかたがない。
俺は被害はかえりみず、生還する事だけを考えた。
なんとか紫苑艦隊の突破に成功した。
かなりの被害だが、まあこれくらいで済んで良かった。
俺はホッと胸をなで下ろした。
しかし、更に前方に敵機影。
紅蓮艦隊と、同じく四天王の１人の疾風艦隊だ。
流石に先ほどと同じ手では、もう突破は不可能そうだ。
スーパーモモに背後を突かせる手もあるが、もう間に合わない。
　達也「あの手しかないか」
俺は陣形を、俺専用の特殊陣形に変えた。
あの手とは、ゲームバグを利用した俺の必殺技。
しかしこれを使う事は、それがばれるリスクがある。
ジークをしとめる時まであまり使いたく無かったが、流石に使うしかなかった。
紅蓮艦隊より、疾風艦隊のが防御が低かったと思われる。
俺は突破場所を疾風艦隊中心部へと定めた。
タイミングをはかる。
射各が１０．２度になるよう調整。
俺は攻撃した。
一撃必殺の攻撃は、見事に疾風艦隊の旗艦に命中したようだ。
敵艦隊が混乱する。
俺は真ん中を突き進んだ。
　サイファ「モモさん、もうすぐそっちに行く。俺が通り過ぎて１０秒後に退却で」
　スーパーモモ「おけおけｗ」
計算通り突破に成功して、俺はモモ艦隊とすれ違った。
何とか退却には成功した。
しかし、これで必殺技がばれるかも。

惑星オパールはものにしたが、それ以上を失ったかもしれない日となった。

## 絶対絶命

ジーク軍と、一部大勢力が率いる連合軍との戦いが、近く大規模に行われるという噂があった。
まあこれだけの大勢力となれば、プレイヤも多く、リークする者もいるだろう。
おそらくは我が軍にもスパイがいるかもしれない。
隠密行動をするなら、信頼できる古くからの戦友に限定しておこなった方がいいかもしれない。
俺らはとりあえずしばしの静観を決め込んでいた。
パープル惑星を手に入れた事で、守りもやりやすくなったし、気を付けるべきは紫苑軍だけ。
先日やられそうにはなったが、相手にもそれなりにダメージを与えているし、大規模には攻撃してこれないだろう。
こちらも力を蓄えないと、もしジーク軍が楽勝したらどうなるか。
最悪のシナリオもシミュレーションしていた。
大規模会戦があるとされていた日は、とても静かだった。
誰もが見守る気持ちだったのかもしれない。
一部空き巣をねらった奴もいたが、逆に瞬殺されていた。
それから３日は何も起こらず、徐々にただのデマだったとの掲示が増えた。
そして以前からの状況に戻りつつあった。
しかし嵐は忘れた頃にやってくる。
それから何日目かの早朝、大規模会戦は突然始まった。
月曜日の朝３時だ。
誰もが眠ってる時間。
プレイヤの少ない時間を狙った攻撃。
始めたのは連合軍のようだ。
俺はたまたまプレイしていた正春に、電話で寝ているところを起こされ、ネットにつないだ。
直ぐに、補給業をしていた時に仲良くしていて、今は友好関係にある軍、七転八倒さんに回線を通す。
　サイファ「始まったの？」
　七転八倒「おう。楽勝楽勝！」
戦場にいないと、関係の無い軍の戦いなんかは見れない。
結果だけなら、全体マップを開いていれば、拠点の所有者だけはわかるのだが、それだけでは物足りない。
数時間後なら、大まかな結果は宇宙新聞というゲーム内の新聞で確認できるが、俺は現状がしりたかった。
だからそれに参加している七転八倒さんに、教えてもらっているというわけだ。
　七転八倒「もろいな。ガンガン拠点いただくぜ。おまえも参加すれば良かったのに。拠点とり放題だぞ」
部隊は数十以上で、ジーク軍前線の拠点を次々と落としてゆく。
更には楽勝だからか、まとまって部隊を形成していた個々の軍の艦隊も、次第に単独行動を取り始め、拠点陥落のペースが上がったようだ。
俺は腑に落ちなかった。
ジーク軍がこんなに弱いわけがない。
　今日子「何かおかしくない？」
ジークの元にいた俺達だから気がついたのだろうか。
やはり今日子さんも疑問に感じているようだ。
　サイファ「だよね。いくらプレイヤがいない時間帯でも、これだけ負けるわけない。むしろ俺は逆の結果を予想してたからね」

　今日子「うん。それに絶対対策は考えていたはずだもん」
俺は今日子さんの言葉に、確信を持った。
おそらく何かある。
今日この時間に攻めてくる事がわかっていなかったとしても、そういった話はあったのだ。
絶対対策している。
もしかすると、いやきっとこの時間に攻めてくる事さえわかっていた可能性も十分ある。
今の状況。
連合軍は今バラバラになり、好き勝手に拠点をとりにいっている。
戦力が分散している。
ジークから見れば、各個撃破の絶好のチャンス。
俺はなんとなく、連合軍の全滅を予想していた。
今現在オンラインの、我が軍の将官クラスのプレイヤは、ＬＯＶＥキラと真でれらと今日子さんだけだった。
俺は招集をかける。
かなりの遠征になるが、我が軍も現場に行くことにしたのだ。
拠点をとりに行くわけではない。
ただ、ジーク軍を勝たせすぎないようにする為。
他にも友好軍に通信を入れる。
捕まったのはグリードさんだけだった。
　サイファ「おそらく朝５時頃、ジーク軍の一気の反撃があるかもしれないので、俺達も現場にいかない？」
　グリード「ほう。ここからジークが反撃すると考えてんのか？」
　サイファ「ええ。何もなくジークがやられるならそれはそれでいいし、でも俺の予想どおりだったら、俺達が今後かなりつらくなるよ」
　グリード「だな。で、戦場にいって何するんだ」
　サイファ「反撃に出たジーク軍を更に背後から襲って、連合軍を助ける」
　グリード「できるか？間に合わなくね？それにリスク以上のメリットあるか？」
　サイファ「速いのだけで行きます。ジーク軍に完全勝利させないだけでも大きなメリットだよ。連合軍の奴らに恩をうってもメリットがあるかどうかはわからんけど」
　グリード「オケ！で、どうする？」
　サイファ「そっちのが近いので、中央お願いします。ジークが中央から両翼に反撃する可能性高いので、その時は背後をついてください」
　グリード「そうじゃ無ければ？」
　サイファ「その時は見つからないように待機で。連絡入れます。俺はジークの右翼からいきますから」
　グリード「左翼は？」
　サイファ「今から友好軍に連絡いれます。急ぐからこれで」
　グリード「おけ！」
俺達は回線を開いたまま、動き始めた。
戦場に向かうのは、俺の艦隊と、キラ艦隊と今日子艦隊だけ。
スピード重視の艦隊編成にして、とにかく速くの到着を重視だ。
向かっている途中、七転八倒さんに通信を入れる。
　サイファ「俺の勘だと、ジーク軍の大攻勢がそろそろあると思う。俺の勘にのってみない？」
　七転八倒「ほう。この状況で？勝ってるのは、相手が寝てるからだと思うけど？」
　サイファ「それならそれでいいけど、一応信用できる連合軍の人にも伝えておいてくれれば」
　七転八倒「わかった。で、俺はどうすればいい？」

七転八倒さんは、俺の予想に乗ってくれるようだ。
　サイファ「では、ジーク領域の左翼の端辺りに移動しておいてください。もしかしたらもうその辺りにジークの大艦隊がいるかもしれないけど。（笑）」
　七転八倒「いたらどうするんだよ？（笑）」
　サイファ「そこにいると考えて、少し離れた位置で待機してもらっていい？」
　七転八倒「わかった。で、お前は？」
そう言えば、こっちの行動を話してはいなかった。
しかし俺は何故か全てを話す事をためらって、結局、
　サイファ「一応そっちに向かうけど、間に合わないかもな」
そうこたえた。
　七転八倒「お前ならもう向かってると思ってたけどな。」
俺はその言葉に少し引っかかったが、気にせず返事もしなかった。

窓の外が明るくなった頃、ジーク軍の反撃が始まった。
バラバラになった連合軍がまとまる事は無かった。
　達也「七転八倒さんの言うこと、みんな聞いてくれなかったのかな」
俺は普通にそう思った。
予想どおり、左翼と右翼、そして中央からの一斉攻撃が始まったようだ。
正確な状況はわからないが、全体マップのその部分の拠点が取りかえされ始めた事が反撃を教えてくれた。
俺はまず、グリードに通信をいれる。
　サイファ「動き出した。艦隊に余裕があれば両方、無ければどちらかのジーク軍の後背をついて」
　グリード「両方行くぞ。これだけの大会戦、楽しいー！」
　サイファ「無理はしないで。健闘を祈る！」
グリードの通信の後、直ぐに七転八倒さんへの通信を行う。
　サイファ「動き出した。中央へ向けて追撃。後背を狙って！」
　七転八倒「みたいだな。もう動いてるよ」
　サイファ「そっか。健闘を祈る！」
　七転八倒「で、結局お前は？」
また聞かれた。
俺の行動。
何故だ？
共に戦っているのだ。
当然だろ？
しかし何故か俺の勘が、警笛を鳴らしていた。
　サイファ「間に合えば、中央でも行くかな」
俺は嘘では無いが、限りなく嘘に近い返事を返していた。
　達也「さて」
俺は一息つくと、右翼から中央へむけて艦隊を進めた。
前方にはキラ艦隊と今日子艦隊。
数は少ないが、精鋭だ。
しばらくすると、グリードからの通信が入る。
　グリード「裏の裏をつくの楽しいな。現在優位に戦闘中！」
俺は一言「おけ」とかえした。
俺達の前にも、ジーク軍の艦隊が見えた。
連合軍を完膚無きまでに叩きのめして進む、ジーク軍の大艦隊。

俺達はその後ろから、一斉攻撃をかました。
　ＬＯＶＥキラ「うは！すげえ楽しい」
　今日子「撃てば当たるし、効果も絶大～」
２人とも順調に敵をたたいていた。
本当に順調だ。
俺達は見事ジークの裏をついたのだ。
順調で当然だ。
いや、待てよ？
俺は何故か不安が襲った。
ジークがこの程度か？
いや、今回は俺達のが上回っただけだ。
でも・・・
何かがおかしい。
撤退するか？
そんな事まで考えた時、グリードからの通信が入った。
　グリード「連合軍の七転八倒軍が背後から攻撃してきやがった。助けにきてやったのに！」
俺はしまったと思った。
七転八倒軍は、どういった経緯か、理由かわからないが、既にジーク軍にとりこまれていたのだろう。
俺が何か引っかかっていていたこはこれか。
理由はわからないが、長年のネット経験が人を見分けられるようになっているのか。
通信が入った。
　七転八倒「やばかったよ（笑）教えてくれてありがとう」
　サイファ「ジーク軍に下ってたのか」
　七転八倒「いや、俺だよ。ジークだよ（笑）」
そうか。
そういう事か。
２垢か。
２垢とは、２アカウントの事で、同じプレイヤが２つのプレイヤを使用する事だ。
しかし宇宙の絆は、２垢できないよう本人確認がしっかり行われているはずだ。
どうして。
　サイファ「どうやって２垢なんて？ばれるとやばいんじゃ？」
　七転八倒「ああ、これ弟のキャラ。チャットだけ使わせてもらってるんだよ（笑）」
そういう事か。
身内か。
俺は納得した。
急いでグリードさんに通信した。
　サイファ「俺達の作戦はリークされていた。左旋回でこちらに逃げてくれ。俺が無事逃がすから」
　ＬＯＶＥキラ「ほっとこうぜ。もう無理だろ？」
　今日子「助けても、もう仲良くしてくれないかもよ」
仲間からの言葉ももっともだったが、どうしても見捨てる事はできない。
見捨ててはいけないと思った。
　サイファ「とりあえず出来るだけするよ。俺の失敗だ」
　ＬＯＶＥキラ「失敗じゃないだろ。俺達は勝ってるし」
確かにそうだ。
今撤退すれば俺達は勝ち逃げだ。
それでも俺は逃げる事ができなかった。

　サイファ「わるい」
　今日子「しかたないねｗ」
　ＬＯＶＥキラ「無理はするな」
２人ともついてきてくれる事に感謝した。
連合軍はほとんど全滅のようだ。
グリード艦隊はなんとかこちらに近づいてきていた。
こちらからも近づき、徐々に距離がなくなる。
見えた。
ボロボロになったグリード軍が表示された。
　達也「うわ～ひど」
グリード軍はかなりひどい状態で、逃げる事以外できそうにない状態だった。
後ろから追いかけてきたジーク軍に、キラと今日子さんが攻撃を始める。
俺はグリード軍を受け入れると、補給を早急に行った。
　サイファ「悪い。七転八倒さんが、ジークの弟だったみたいで、作戦が筒抜けだった」
　グリード「そなんだ。どおりで完璧な反撃だもんな」
　サイファ「俺のミスだ。しばらく押さえるから逃げて」
　グリード「ああ。いずれリベンジしようぜ」
グリードの言葉に、少し救われた。
　七転八倒「やっぱり来てたな。知ってたけど（笑）」
七転八倒本艦隊と、ジーク軍の大艦隊、２つを相手に俺達は直ぐに危険な状態になった。
逃げるのもかなりきつい。
必殺技を使ってもダメだろう。
もうタダの敗走で、成功するか失敗するか、それだけのようだ。
俺は諦めた。
どうにでもなれと。
そんな時、後方から機影が近づいてきた。
友軍だった。
　真でれら「おまたせ～」
高速移動は向かないので、つれてこなかった真が、勝手についてきていたようだ。
　サイファ「助かったかも～サンクス」
俺がそう言うと、真艦隊は、俺らの艦隊の前に出て、鉄壁の守りを見せた。
　サイファ「よし。ゆっくり右に進路を取りながら、戦場を離脱する」
俺達はゆっくりと艦隊を右にずらしていった。
なんとかいけそうだ。
どこかでキラ、今日子、そして真を先に行かせて、最後に俺が逃げれば追撃もできないだろう。
ひとりずつ順番に戦線を離脱してゆく。
そして最後は俺だけだ。
まあスピードで俺についてこれる奴はそうそういない。
俺は撤退を始めた。
敵が追いすがるが、少しずつ引き離せるだろう。
後方への攻撃が徐々に届かなくなる。
俺は息を吐き出した。
うまくいきそうだ。
しかし、敵艦隊の一部が高速で迫ってくる。
　達也「なんですとぉ！」
敵に俺より高速な艦隊があった。

これは完全に誤算だ。
　達也「どんな艦隊だよ！」
俺は弾幕やらミサイルやら、とにかく使用しまくりで、とにかく追撃を振り切ろうとする。
武器も弾幕も全て使い切ったが、なんとか後ろから来る敵を、徐々にひき離す事に成功したようだ。
今度こそ本当に助かったか。
しかし俺は又愕然とする。
　真でれら「そっちにジーク軍本体がいった」
　ＬＯＶＥキラ「すれ違った。俺達は無視して」
まもなく正面にジークの本艦隊が見えた。

## 意外な同盟

俺は自分の領域になんとか生還していた。
昨日の大戦で、俺が生還できた事は奇跡に近い。
もう戦う術の無い俺の艦隊の前に、ジーク艦隊が現れたのだから、助かったのは偶然だ。
もう諦めていた。
ジークからの通信を何気なくひらいた。
ジークは一言、「グッバイ！（笑）」と、それだけ言ってきた。
俺は何も返事しなかった。
その後、何故かジーク軍が一瞬にして壊滅状態になっていた。
俺はその隙に右に進路をとって逃げた。
後方で見える戦闘には、紫苑軍の四天王が勢揃いしていて、俺の必殺技を使った攻撃をしていた。
ジークの旗艦はなんとか逃げたようだが、紫苑軍のほぼ完璧な勝利だった。
昨日の連合軍対ジーク軍の戦いで、最後に勝利を収めたのは、終わってみれば紫苑軍だったということだ。

俺は我が軍の主要なプレイヤを集めて会議をしていた。
必殺技が紫苑軍にばれてしまった以上、自分だけで密かに隠しておいても仕方がない。
皆に方法を説明し、対応策も教えた。
　真でれら「こんなのあるんだったら、早く教えてくれよ」
　サイファ「ジークをやるときまで、ばれないように隠してたんだよ、みんな使うと直ぐばれるだろ？」
　ＬＯＶＥキラ「まあな。でもこれで、ばれたからもう使えないかもな」
まあそういう事だ。
紫苑軍があれだけおおっぴらに使ったんだ。
皆が使うか、それともクライアントの方で修正が入るか。
なんにしても、使える戦術のひとつ程度になる事だろう。
そして、我々の軍が今後ジーク軍とやり合うためには、新たな何かを必要とする事になったわけだ。
だから、この日から俺は研究に力を入れた。

我が軍と紫苑軍は、必殺技が広まるまでにこれを多用して、かなりの勢力拡大に成功していた。
まさかこれほど使い続けられるとは思っていなかったが、結局は落ち着くところに落ち着いた。
ジーク軍も七転八倒軍を正式に傘下におさめて、基盤を固めていった。
全体マップを見ると、かなりわかりやすい勢力図になっていた。
しかし、弱小軍が減ってくると、国盗りゲームは膠着状態に陥った。
小競り合いは毎日沢山みられたが、大きな会戦は滅多にない。
それは、大艦隊を率いて戦闘するには、あまりにも沢山の金と物資が必要となるからだ。
その後別の大勢力に侵攻されれば、どこまでやれるか疑問だ。
先に動いたら負ける。
そんな雰囲気があった。
更には大将自らが出陣してくる事も無くなった。
一発逆転のカードは、おそらくは大将の旗艦を破壊する事だけだ。
それを狙うプレイヤもおそらくいるだろう。
それでも、偶に中規模の会戦が、ジーク軍と紫苑軍によって行われる。
そして勝利する。

この２つの軍が２大勢力として君臨していた。
このままでは、この２大勢力がいずれ全ての領域を２分して、そしてどちらかが宇宙制覇を果たすだろう。
今ならまだ、対抗の手段はあるはずだ。
俺達は毎日会議を繰り返していたが、良い案は出なかった。
　グリード「少しずつ削られるな。このままだと俺らの軍も後数ヶ月かもな」
グリード軍の領域は、下にジーク、右に紫苑と、なんともきついところに位置していた。
前までなら小さな軍の領域が壁になっていたのだが、今ではもう存在しない。
　サイファ「なんとかしなければと思うんだけど、俺達が協力するにしても場所がはなれすぎてるし」
そうなのだ。
俺とグリードさん、それに夜露死苦さんが協力すれば、まだ２大勢力に十分対抗できる。
俺達は協力して対抗する手段を模索していた。
　グリード「紫苑軍を味方につける事はできないのか？」
俺はグリードの言葉にハッとした。
全く考えていなかった。
紫苑軍とは、常に敵対状態だった。
あの時は助けられたとはいえ、以前も以後も、時には正面から力をぶつけあい、時には策をめぐらせた相手だ。
　サイファ「全く考えてなかったけど、一旦どちらかについてどちらかをやるのは良いかもな」
　グリード「まあ、同盟にしても協定にしても、承諾してくれるかどうかはわからんけどな（笑）」
確かにグリードの言うとおりだ。
ジークさんは、軍に下るなら受け入れるかもしれないが、同盟は無理だろう。
もう一方の紫苑さんは、ほとんど喋った記憶がないから、どんな人かよくわからない。
　サイファ「グリードさんは、紫苑さんを知ってるの？」
　グリード「いや、全く！」
俺は考えた。
紫苑さんとたとえば同盟を結ぶとして。
同盟の条件は、おそらくジーク軍壊滅までとするのか。
で、同盟国は我が軍と紫苑軍、グリード軍に夜露死苦軍。
ん？
夜露死苦軍は、紫苑軍とは我が軍以上に険悪ではないだろうか。
グリード軍とも紫苑軍は敵対している。
冷静に考えて無理だろうとの結論に達する。
　サイファ「やっぱり無理っぽくない？（苦笑）」
　グリード「まあそうだろうな。でもダメ元で言ってみるしかないだろ」
グリードさんもこの同盟が現実的でないと思っているのだ。
それでも頼らざるを得ない。
俺達が追いつめられていることを改めて感じた。
とにかく、俺は紫苑さんへの通信を試みてみる事にした。
通信してみたが、なかなかつながらない。
俺は他の事をしながら、時々通信を試していた。
夜の８時頃になって、ようやく回線がつながった。
まあ、平日の昼間からゲームしてるのは、ニートと主婦くらいなもんだからな。
　サイファ「こんにちは。紫苑さん」
　紫苑「(^0^)/」
相変わらずよくわからない人だ。

偶に話しても話がかみ合わなかったり、こういった絵文字の多い人だ。
　サイファ「今日は話があるんですが」
　紫苑「ん」
　サイファ「単刀直入に言います。同盟を結びませんか？」
ダメもとだし、まともに話しそうにないし、とにかく言いたいことを言った。
すると思わぬ返事が返ってきた。
　紫苑「グッド！」
　サイファ「それはオッケーって事でしょうか？」
　紫苑「ｙｅｓ！」
　サイファ「そうですか。で、他にも同盟したい軍があるのですが」
　紫苑「Ｎｏ！」
どうやら我が軍だけならオッケーらしい。
　サイファ「では少し考えさせてもらっても良いですか？」
　紫苑「(^0^)」
いいらしい。
俺は一旦通信を切った。
直ぐにグリードさんに通信をつなぐ。
　グリード「同盟の話か？」
　サイファ「ええ。結論から言うと、我が軍だけならオッケーだって」
　グリード「そうか。今うちの領域欲しそうだもんな」
　サイファ「やっぱり俺達だけでなんとかするしかないかな」
　グリード「いや、そうともいえんぞ。紫苑軍と同盟結びなよ」
俺は直ぐには何を言っているか理解出来なかった。
　サイファ「俺達はメリットあるかもしれないけど、グリードさんにはデメリットでしょ？」
　グリード「確かに紫苑軍に対しては、今後よりきつい攻撃を受けるかもしれないけど、ジーク軍からの攻撃だったら手を貸してもらえるだろ？」
　サイファ「なるほど」
そうなのだ。
俺と紫苑軍が結べば、俺は紫苑軍の領域を安全に航行できる。
それはグリード領域まで楽に移動できると言うことだ。
　グリード「な。紫苑軍が大きくなったとは言っても、まだジーク軍とは力の差がある。紫苑軍ならなんとかなるけど、ジーク軍は単独ではもうおさえられない」
　サイファ「なるほど。しかし現状維持だけだとダメだろ？」
　グリード「サイファのところ、同盟結べば超安全になるだろ？半分は領域増やすために使うとして、半分はこっちに手をかしてよ」
守りだけでなく、領域拡大にも手をかせと言うことだ。
でもそれは可能だ。
グリードさんが言ったとおり、紫苑軍さえ攻撃してこなくなれば、我が領域はごく少数でも安全が確保できそうだ。
もちろんジーク軍が遠征して来る可能性も０ではないけど、メリットが少なくデメリットが大きい。
　サイファ「よし。それで行くか」
俺は直ぐに、紫苑軍との同盟を締結した。
条件は、ジーク軍壊滅まで、もしくは３ヶ月という条件で。
この３カ月の同盟が、終演へと一気に加速させるものとなった。

## 加速する戦況

同盟を結ぶと、直ぐに紫苑軍は動き出した。
夜露死苦軍への大攻勢が始まった。
俺は紫苑軍と同盟を結んでいるので、夜露死苦軍を助ける事ができない。
この隙にジーク軍が紫苑軍を攻めるのかと思ったが、期待どおりは動いてくれないものだ。
逆に一番いやな動きをしてくる。
もちろん、相手のいやがる事をするのが勝利への鉄則。
囲碁や将棋なんかでも、相手がいやがる手こそが決めてとなるのだ。
今日も俺はグリード軍領域で、ジーク軍と抗戦していた。
　グリード「お前がいてくれて助かったよ」
紫苑軍と同盟を結んだ事で、俺はこうしてグリードの手助けができる状態だ。
しかし、この攻撃を産んだのも、また同盟を結んだ事が原因じゃないだろうか。
俺は少し後悔していたが、それを口にはださなかった。
それでも、ジーク軍の攻撃は全て退けていたし、我が軍の領域拡大も順調。
最低限の成果は上げていた。
　サイファ「今日もなんとか守れたな」
ジーク軍は引き上げていった。
ここ何日も同じ事を繰り返していた。
実に退屈でやる気を削がれる毎日。
それでも状況が、決して俺たちに不利には動いていない事が、わずかなやる気を絞り出していた。
そんな日常的な戦闘の後、ホッと一息ついた時、夜露死苦軍壊滅とモニタの上部に表示された。
　達也「なんで？やられるにしても早すぎるだろ？」
俺は全体マップを開いた。
元々夜露死苦軍の領域だった場所は、沢山の色の、光の点があった。
　達也「旗艦が落とされたのか」
本来は、拠点を全て押さえてから、旗艦を落とされ壊滅となるのだが、拠点はそのままに旗艦だけが落とされたようだ。
この場合、全ての拠点は、一度その拠点の最上位階級者が臨時の軍の大将となる。
そして直ぐに、元々の階級が大佐以下の者は、近くの臨時の軍に吸収される。
その流れのとおり、夜露死苦軍の領域だったいくつもの光の点は、その色をいくつかにまとめていった。
この後はいろいろな事が起こる。
大将がＮＰＣの時は２種類。
解散して、一時的にその拠点が中立化する。
もうひとつは、友好関係の高い近くの軍に自動で投降する。
我が軍に沢山の投降軍が押し寄せた。
　達也「面倒な事になっちまったー！」
俺は声を上げて嘆いた。
今まで壁になってくれていた夜露死苦軍がいなくなることは、自軍領域をあけてグリードの手伝いばかりしていられない事になる。
俺はとりあえず、投降軍を全て受け入れる。
俺の領域はドンドン広がった。
　サイファ「やばい事になった。悪いけど一旦戻る」
　グリード「だな。こっちはなんとか頑張るよ」

俺はグリードに断って、自軍領域へと向かった。
で、ＮＰＣでは無い臨時軍はどうなるか。
そのまま軍を維持して、新たな軍にする事も可能だし、ＮＰＣのやったように投降や解散も可能。
そのプレイヤに全てゆだねられる。
さてどう動くか。
軍を維持しても無駄だから、おそらく解散か投降。
投降するなら、大きいところにいくだろう。
これでますますジーク軍がおおきくなるかな。
そんな事を考えながら、俺は自軍領へと急いだ。

結局、臨時軍の半分以上は、我が軍に投降してきた。
不戦協定を結んでいた友好国である事と、戦闘でも日頃から信頼関係を築いてきた事が良かった。
残りの一部はジーク軍や弱小軍に下り、残りは紫苑軍の一気の掃討戦に屈した。
これでもう、グリード軍領域へのジーク軍の侵攻を、共同戦線で守る事は不可能になった。
我が領域は、ジーク軍領域と隣接し、他を守りに行く余裕が無くなったからだ。
しかし、今回の事はマイナス面ばかりではない。
我が軍の事だけをみれば、大きなメリットがあった。
我が軍の領域は一気に倍、良い人材も増えた。
再編には苦労したが、特に速攻があるわけでもなく、とりあえず落ち着いた。
まあその辺は、ジーク軍も紫苑軍も時間がかかったのだろう。
その間侵攻してくる事は無かった。
数週間は、ジーク軍とグリード軍の小競り合い程度で、静かな日が続いた。
その間に以前研究を進めていた兵器がようやく完成した。
俺は信頼出来る仲間のみでそれをテストする事にした。
　真でれら「おお。すげえ。こんなの研究成功するのか？」
　今日子「これだとゲームバランス崩れない？」
　キャンサー「うむ。すげ！」
　スピードスター「♪」
　サイファ「でもこれ、作成成功率１０％だし、金が馬鹿高いし、燃費悪いし、移動速度制限されるし、デメリット多すぎるけどね」
　ＬＯＶＥキラ「それだけのデメリットを付けないとバランス保てない兵器って事でしょ。使いこなせれば最強だね」
　薔薇の貴公子「だな。俺なんかサイファ軍で良かった気がするよ」
　サイファ「いや、これでもまだまだ戦力負けてるよ。それにこれ、使いこなせるの俺の艦隊だけかもな」
そう。
ずっと研究してきた兵器は、それは一気に戦況を変えてしまいかねない強力なもの。
それだけに使用条件をクリアするのが大変だった。
それらを考えれば、１００％使いこなせるのは自分だけだった。
　真でれら「でもこれなら、旗艦で前線に行く危険性も緩和されるし」
　サイファ「旗艦で前線に行かないといけないから、危険はあるけどな」
使えるのが自分だけと言うことは、旗艦自ら最前線に行かなくてはならないと言うことだ。
もちろん今までも最前線では戦ってきたが、それは補給活動中心でガチの戦闘はそうそうない。
しかし今回は、攻撃の為の最前線。
最前線の中の最前線に行く必要があった。
　ＬＯＶＥキラ「それよりも、もうひとつの方はまだなのか？」

キラが言っているのは、今回完成した兵器と平行して開発していたもうひとつの兵器。
　サイファ「ああ、あっちのがゲームバランス崩れるだろ。そう簡単には無理だろな。むしろ完成すら危ぶまれるぞ（笑）」
　真でれら「だな。あっちは期待しないでおこう」
皆とのテストの後、俺は新兵器を搭載した新型艦船の製造に没頭した。
もちろん皆に手伝ってもらいながら。
それから２日後、新型艦船ができあがった。
俺は「補給くん３号」と名付けた。

## ジークの策

俺は、今日ネット購入したＰＣを、持ってるＰＣ横に新たに設置していた。
ＰＣを購入した理由は、軍が大きくなりすぎて、プレイヤ同士のチャット通信が傍受されやすくなったので、ゲーム内通信では無く、外部のチャットを使う為。
ちなみに暗号化とか騙しとかは、ＮＰＣへの命令の時にしか使わない。
混乱を呼ぶからね。
で、外部のチャットの利用だが、軍が大きくなったジーク軍とか紫苑軍では、既にやっているって話だ。
はっきりとした情報が無いのは、おそらくは腹心の部下とだけ使っているのだろう。
もしチャットをやっているサイトがばれたら、作戦が筒抜けになる。
俺も、リアル友達と古くからの信頼できる者だけにサイトを公開。
パスワードも設置して万全をきした。
今や我が軍は、ジーク軍、紫苑軍に次ぐ、第三勢力。
と言っても２勢力には大きく引き離されてはいるし、すぐ下にはグリード軍などいくつかまだ存在すから、その座はまだまだ危うい。
まあとにかく全てが整い、俺は少し画面の全体マップを眺めていた。
そうしたら、リアル商品を買った時にもらえる何かが届いたと、メッセージが表示された。
「ＰＣ購入ありがとうございます。イベントが発生しました。ＰＣショップでエディソンとの出会い」と、表示されていた。
　達也「なんだろ？まあどうせ大したもんじゃないだろうけど」
俺がそう思うのには理由がある。
今まで貰った物や起こるイベントは、少し前なら使えるものだったが、ココまでの勢力になってしまっては大したことないものばかりだったから。
俺は適当にチェックした。
ん？
手に入れたのは、ＮＰＣのメカニックで研究者のエディソン。
よくみるとレベルは尋常じゃないくらい高い。
俺はドキドキしながら、直ぐに第１３コロニーに配属した。
淡い期待を込めて。

しばらくして、ジーク軍がグリード軍への全面攻撃を開始した。
このところ沈黙していたが、とうとう大規模な動きだ。
最初に動けば負けると言われていたが、それでも尚動いてくるって事は、それなりの準備があるのだろう。
俺はどうするか迷っていた。
そんな中、紫苑さんからの通信が入った。
珍しい。
俺は回線を開いた。
　紫苑「チャンス！ジーク殺！」
うむ。
おそらくはジーク軍を攻めるチャンスだから共に攻めようといっているのだろう。
俺は一応確認する。
　サイファ「一緒に攻めようと？」
　紫苑「(^0^)/」

どうやらそうらしい。
俺は申し出を了承した。
早速友軍を招集する。
と言っても、紫苑軍と同盟しているわけで、敵はジーク軍だけなわけだから、皆最前線に集まっていた。
　サイファ「今から紫苑軍と協力して、ジーク軍を攻撃する。グリード軍への援護にもなるから、俺は了承した」
　ＬＯＶＥキラ「おお。紫苑と一緒ってのが微妙だけど、大会戦になりそうだな」
　真でれら「ココが勝負かもな。ジークがグリードんとことったら、かなりやばいもんな」
　キャンサー「うむ」
　今日子「でも紫苑軍が本気で行くかどうか」
　サイファ「せっかくジークがつくってくれた隙だ。逃さないでしょ」
　今日子「ジークがこんな隙、罠でなくてつくると思う？」
確かに。
俺は考えた。
俺がジークの立場だったらどうしただろう。
今大艦隊でグリード領域に入っている。
残りはどれくらい残す？
どう守る？
旗艦は？
考えても、どう考えてもわからない。
でもただひとつわかっていること。
今やらなければ、ジークが宇宙制覇する可能性が大きく上がると言うことだ。
それに紫苑さんとも出撃の約束をした。
　サイファ「ココはモモさんと星さんにまかせます」
　スーパーモモ「は～いｗ」
　スピードスター「♪」
　サイファ「後はみんなついてきて。本気で行く！」
誰も反対はしなかった。

どうやら紫苑さんも、旗艦自ら出撃しているようだった。
本気が伝わってくる。
俺も本気で出撃させて良かったと思った。
　サイファ「紫苑さん、では、連携する時は連絡ください」
　紫苑「(^0^)」
・・・
俺はマップ最下方から、紫苑軍はマップ中心から、それぞれジーク軍領内に入っていった。
敵艦隊は見あたらない。
俺達は、拠点からだけの攻撃に少しダメージを食らうものの、順調に拠点を落としていった。
　ＬＯＶＥキラ「順調だな」
　真でれら「完全に自軍領域あけてやがるよ」
　サイファ「でも、グリード領域にジーク本人は入ってないそうだから、どこかに隠れてもしれないし、気を付けないと」
　薔薇の貴公子「どこかで見たことある戦略だな（笑）」
　サイファ「ああ、あのアニメだろ？補給線をのばして、疲弊したところを一気にたたくって」
　薔薇の貴公子「だな。このゲームではあんな戦い無理だけど」

今話してる戦略。
まあ、補給しづらい自軍領域に敵を誘い込み、補給線がのびたところでそれを絶つ。
補給物資が届かなくなり、前線の艦隊が疲弊したところで一気に攻撃し、一網打尽。
そんな作戦なわけだが、このゲームでしっかりと補給線を確保しなくてはならないような、何日も続くような戦いは存在しない。
そらそうだ。
ゲームをしている人は、リアルな生活も存在するのだ。
長くても金曜の夜から日曜の夜までの戦いくらい？
いや、それでも寝なくてはならないので、艦隊を入れ替えるから、そんな戦い方は存在しないのだ。
その代わり補給船の役割が重要になってくるわけだけど。
　達也「それにしても、何か気になるな」
俺はグリードさんに、戦場の状況を確認した。
　サイファ「グリードさん、そっちどうですか？」
　グリード「結構きついな。本気みたいだ」
　サイファ「そうですか。こっちはジークの艦隊が全くいなくてとまどってるよ」
　グリード「罠か？」
　サイファ「わからない」
そうなのだ。
わからないのだ。
ジークが何をやっている？
ホントに領域を無視してグリード軍壊滅を狙ってる？
　サイファ「そっちから撤退するジーク軍は？」
　グリード「とりあえずいないかな。ほとんど全艦隊集合してるんじゃね？」
だったらグリード軍を助けに？
いやもし伏兵がいて、こっちの本拠地つかれたら、戻れない。
艦隊を散開させて、一気に拠点をとりに行くか？
前と同じように、それを狙って各個撃破されたらやばいだろう。
タイミングを狙って補給線を絶ちにくる？
いや、数時間の戦いなら補給線無しでもやれるのだ。
同じ考えがグルグルと巡る中、ただ地道に拠点を落としてゆく時間が過ぎた。
紫苑軍も同じようだ。
ただただ、拠点を落としているようだ。
グリード軍は、その領域の半分を失っていた。
　今日子「私、明日朝早いから、そろそろ撤退して寝るね」
気がついたら、０時だった。
　キャンサー「俺も」
ココで２人いなくなるのはきついが、こればかりは仕方がない。
　サイファ「おつかれ！」
　ＬＯＶＥキラ「おっつ」
　真でれら「おやすみー」
　薔薇の貴公子「おつかれん」
それぞれ挨拶をかえした。
さて、戦力が減って、どうするべきか。
俺は紫苑さんにどうするか聞く。
　紫苑「まだまだー」
どうやら紫苑さんはまだまだ頑張るみたいだ。

それならこちらだけ撤退するわけにもいかない。
俺達はただ単調な侵攻を続けていた。
かなり眠くなってきた。
時計は３時を回っていた。
グリード軍との大会戦は、まだ続いているのか？
紫苑軍は・・・
そういえば両者とも、通信チェックを１時間以上していない。
どうなっているのだろう。
俺は眠い目をこすった。
ん？
俺は少し眠っていたのか？
通信が入っていた。
　グリード「俺達もうダメかも」
　ＬＯＶＥキラ「まだやるのか？」
　グリード「最後だ。華麗に散るぜ！」
　ＬＯＶＥキラ「おーい」
　グリード「寝てるのか？寝落ち？」
　真でれら「寝てるんじゃね？」
そんな通信が入っていた。
しまった。
俺はハッとした。
そして意識がはっきりとした。
慌ててマップを見た。
グリード軍領域は、既にジーク軍の色に塗られていた。
俺は尚も慌てて通信する。
　サイファ「すまん。一瞬寝てた」
　真でれら「ああ、そうみたいだな」
　ＬＯＶＥキラ「まあ、数分だけどな」
俺は友達の言葉を聞いて、直ぐに回線をグリードに変更する。
しかし通信はつながらなかった。
グリード軍が壊滅している事を意味していた。
俺は更に、紫苑軍へと通信する。
　サイファ「紫苑さん、どうしてます？」
　紫苑「潮時」
おそらくこれは、撤退を意味しているのか。
それとも既に攻撃をやめて再編までしているのかもしれない。
　達也「やばいな」
俺は思った。
もし奪った領地を確保したいなら、防衛艦隊と物資の移動や、人員の配置をしなければならない。
このままもし退却するなら、拠点を奪うのに使った物資や、やられた艦船が無駄になる。
って、やられた艦船？
俺は改めて自軍艦隊を調べた。
拠点を攻撃し続けて、自軍艦隊はかなりやられていた。
　達也「もしかして、この状況を狙っていた？」
俺の予想はこうだ。
ジークは完全に領域を空けてグリード領域制圧に出る。

俺や紫苑軍は、その隙をついて攻める事になる。
しかし以前の連合軍との戦いの時に、分散した艦隊の各個撃破にジーク軍が成功しているため、俺達はそれを恐れ一気に攻める事はできない。
その時間にグリード軍をできるだけ攻撃。
できれば壊滅までもってゆく。
おそらく金とか物資が大量に必要だが、最近は会戦が少なかったから余裕ができたのだろう。
それを見事に成功させた後、ジーク領内に侵攻してきた、拠点との衝突でそれなりにダメージをくらっている俺達に全面攻撃。
追い返すだけでも、俺達はただダメージをくらって逃げた事になり、こちらは大きな損失。
逆にジーク軍は、とられた拠点をとりかえす手間はあるが、ほとんどリスク無しで取り返せる。
何故なら拠点の設定変更や人員の配置等、まだやっていないから。
紫苑軍はもしかしたら、既にうまくやっているかもしれない。
しかし俺は眠かったから頭が回らず、更には作戦に気がついていなかったから、ココまで何も出来ていなかった。
せめて少しでもなんとかするか。
俺は急いで起きてるプレイヤを確認する。
　サイファ「後方で動ける人、誰か起きてる？」
少し返事がなかったが、２人連絡が入った。
　スーパーモモ「もうすぐ寝ようかとおもってたいｗ」
　スピードスター「余裕♪」
俺は起きてるのが２人だと確認すると、それで出来る最前線を考えた。
そして直ぐに指示をだす。
　サイファ「移動要塞リングを最前線にする。モモさんと星さんはそちらに移動。できるだけ物資と人員をつれてください」
　スーパーモモ「しかたないなぁ～それ終わったら寝るからねｗ」
　サイファ「ごめん。よろしく！」
　スピードスター「♪」
せめて少しでも領域を広くしないと、今回の侵攻が損失だけになる。
俺はそれだけは避けるべく指示をした。
それになんと言ってもグリードさんがやられたのだ。
今後を考えると、絶対必要だと思われる。
俺は最前線で、ただただ駐留して敵が来ない事を祈っていた。
それでもおそらくは、ジーク軍がすぐに殺到する事だろう。
圧倒的な戦力で。
俺は全体マップを眺めた。
半分近くはジーク軍領、残りの２／３は紫苑軍領、残りの半分ちょいが我が領域。
　サイファ「もう勝ち目なんて０に近いかもだけど、少しでも勝てる可能性を増やす為に頑張るか」
　ＬＯＶＥキラ「だな。俺達よくココまで頑張ってきたよな。うまくいけば１０億が手に届く位置だぜ？」
　真でれら「まだあきらめんぞ。俺は」
　薔薇の貴公子「夢はみさせてもらったよ。金ほしかったな」
今までの事を振り返り、そして現状を見て、俺達はただ敵の大艦隊が来るのを待った。

まもなくジーク軍の大艦隊がやってきた。
これだけ早く来るって事は、紫苑軍はうまくやったであろう事がわかった。
正面から堂々と迫る艦隊は、我ら４人の５艦隊の十何倍もの規模だ。
こちらもプレイヤをうまく集めてやれば作れなくはない規模だが、いろんな人が集まるネットゲームの世界。
連絡を取りあって日にちを決めないとそれは無理だ。
　達也「こういった攻撃陣営の利点を、完全に使いこなしてるよな。よくこれだけ集めるよ」
俺は少し感心した。
そして、間もなく戦闘は始まった。
真でれらに前線を押さえさせて、しばらくはにらみ合い。
　サイファ「とにかく時間を稼ぐ。何も無ければこのままを維持」
とにかく時間だ。
最前線にする予定の、リングへの物資の移動と設定。
モモさんにまかせているから、そんなに時間はかからないだろうが、それでも今行かせるわけにはいかない。
今行かれると間に合わないだろう。
　ＬＯＶＥキラ「別動隊が左から来るみたいだぞ」
　サイファ「嫌な方からくるな。俺が押さえる」
俺は艦隊をやや左に旋回し、左からの艦隊に備えた。
　真でれら「大丈夫か？左向くと、撤退がつらくない？」
　サイファ「ああ、まあね。でもアレがあるし」
　真でれら「ああ、あれね。なるほど」
ここの領域で左に向くと、逃げる時に旋回するか、もしくは右に進路を取るしかない。
で、旋回は一時攻撃の的状態になり、その後も背後をとられるので愚行とされている。
そしてこの場合に、右に進路をとって突破をはかる場合、敵の大艦隊に向けて進む事になるから、どちらもリスクが高いのだ。
逃げる事を考えた場合、一番きつい場所に、俺は旗艦を置いた事になる。
やはりジーク軍もそれはわかっているようで、多少の損失覚悟で、旗艦狙いに陣形を変えてきた。
　サイファ「おお、完全に俺狙いだな（笑）」
　ＬＯＶＥキラ「そらそうだろ。この状況で旗艦が一番危険な位置にいるからな」
　真でれら「これでアレが機能しなかったら、俺ら終わりだな（笑）」
　薔薇の貴公子「でもアレをココで見せるのはもったいないかもな」
　サイファ「まあ、出し惜しみできる立場じゃないからね」
一見状況は、ますます俺だけに不利な状況になってきた。
しかし俺達に焦りはない。
この状況なら、俺達の勝ちで逃げられる。
　スーパーモモ「終わったよ。寝るねｗ」
待っていた通信が入った。
　サイファ「サンクス！完璧？」
　スーパーモモ「拠点の守りは任せてよ」
　サイファ「信頼してるよ。じゃあゆっくり寝てね」
　スーパーモモ「うん。ではでは～」
　スピードスター「俺も♪」

　サイファ「星さんもお疲れ！」
　ＬＯＶＥキラ「おっつ」
　真でれら「おやすみー」
　薔薇の貴公子「おつかれん」
どうやら最低限の戦果はあげられたようだ。
さて、後は逃げるだけ。
俺はまず他の３人を、右まわりで逃がす。
敵艦隊は、それを追わずに、全艦こちらに向けてきた。
　達也「さぁ～て・・・」
俺は右まわりで、敵艦隊へと突撃を開始した。
この今の状況を見たら、おそらくこちらの全滅はまず間違いない状態だろう。
しかし・・・
俺は先日完成したあの兵器を発動させた。
俺の全艦隊の周りを、沢山の弾幕が包む。
艦隊を上から見た映像は、まるで不死鳥のようだ。
敵艦隊に我が艦隊が食い込んでゆく。
触れる敵艦船を次々と破壊。
爽快だ。
気がついた敵艦隊が、こちらと距離を取り始めた。
ラッキーだ。
これは一種の無敵状態を作る、連続弾幕防御兵器。
本来守る為の弾幕だが、触れれば爆発するしダメージを負う。
だがそれは無限に続けられる訳がない。
弾幕が無くなれば、そこまでだ。
だから補給戦艦の艦隊である俺の艦隊向きの兵器。
それでも長くは無理だ。
俺は一度弾幕を弱めに調整する。
離れた敵が再び距離を詰めようとする。
こちらも再び発動。
近寄ってきた艦船が破壊される。
また離れる。
こちらもまた弾幕をゆるめる。
両横を波形になって進む艦隊。
なんだか我が艦隊は、川を上る魚のようだった。
気がつくと突破は完了していた。
お互いが背中合わせな配置。
完璧だ。
俺はそのまま全速前進で、戦場を離脱した。
切り札を見せてしまったが、それなりの戦果は得られた、勝ったとも負けたとも言えない、少し歯がゆい戦闘だった。

# 薔薇は散る

紫苑軍との同盟期間であった３ヶ月が過ぎた。
こちらとしては再び同盟を継続したかったが、同盟は拒否された。
ただ、口約束ではあるが、できるだけ敵対するのはジーク軍であることで同意した。
全体マップは、既に４軍のみになっていた。
正確には、拠点１つだけの軍が２つと、在野の放浪軍が沢山存在するのだろうが、全体マップでは確認できない。
マップの４５％はジーク軍、３５％は紫苑軍。１５％が我が軍で、５％がダイユウサク軍といったところだ。
ダイユウサク軍は、マップの隅にその領域を持っていて、今までに戦場で艦隊を見たことがない軍だ。
何故この軍がここまで残ってきたのか、俺には不思議だったが、きっと守りが堅いのだろう。
それよりも、２大勢力と対抗する策が必要だ。
だがそれはまだ無いから、とりあえず時間が必要といったところか。
しかし放っておいたら、２大軍はどんどん国力を充実させ、物資や金が増え、ますます手に負えなくなる。
我が軍は黙っているわけにはいかなかったから、常にジーク軍と小競り合いを繰り返していた。
だが、それはなかなか良い戦略だった。
何故ならこちらの秘密兵器だったアレ、「鳳凰の川上り」と名付けたアレが、かなり敵の戦力を削ってくれる。
領域は変わらなかったが、戦力差が開く事は無く、むしろ戦力は徐々に詰まってきていた。
今日も俺はジーク領域内をかきまわしていた。
　サイファ「チマチマやってるけど、これ効果的だよね」
　真でれら「いいね。これを繰り返せば、もしかしたら我が軍の逆転があるかもな」
　ＬＯＶＥキラ「再び夢みれるね」
拠点を攻撃せず、素通りして今日も撤退だ。
俺達は撤退の準備と、鳳凰発動準備をした。
その時、左から中規模の艦隊が現れた。
　サイファ「今日は逃がさないってか？」
　真でれら「結構な規模だな」
　ＬＯＶＥキラ「おいおい、ジークの本艦隊だぞ」
　薔薇の貴公子「マジだ。やられにきた？」
現れた艦隊は、ジーク本人の艦隊。
俺は何かいやな感じがした。
　真でれら「問題ないでしょ。鳳凰で突破できないわけないよ」
俺は嫌な感じがしたが、真の言葉で自信を取り戻した。
　サイファ「おけ。俺が突破口を開くから、後ろついてきて」
　ＬＯＶＥキラ「うい」
　真でれら「おけ！」
　薔薇の貴公子「らじゃ」
俺はまっすぐジーク艦隊に向かった。
後にキラ、真、薔薇さんが続いた。
鳳凰を発動した。
我が艦隊は、ジーク艦隊真ん中に食い込んでゆく。
　ＬＯＶＥキラ「うは！いいね」

我が艦隊が敵を分断し、キラが追い打ちをかける。
なかなか良い感じだ。
こっちの５，６倍ある艦隊に対して、出来すぎな感じ。
改めてうまくいくと、また逆に不安がでてきた。
何故ジーク本人がでてきたんだ？
鳳凰の強さは、もうわかってるはずだけど。
腑に落ちないまま、サイファ艦隊はジーク艦隊を抜けた。
その時だった。
少しずつジーク艦隊からの攻撃が強くなる。
　サイファ「え？」
俺は鳳凰を発動したままにした。
　ＬＯＶＥキラ「なんでこれだけの攻撃できる？」
普通攻撃は、後方へ行う事が困難だ。
それは後ろにエンジンがあり、武装が前方による為だ。
それなのに、後方に行った途端、攻撃が一気に強くなった。
俺は敵艦船の形状を慌ててモニタに映した。
　達也「なんじゃこりゃ！」
俺は慌てて指示を出す。
　サイファ「守り固めて全速前進！」
俺の指示に、返事は無かったが皆従う。
それにしても。
敵艦船の形状は、今までに見たことが無い形状だった。
エンジンが前方についており、後方に武装がしてある。
もちろん前方にもそれなりに有ったが、明らかに後方特化。
　達也「新兵器開発してるのは、俺達だけじゃないってか」
きっとジークが開発した、新兵器。
後ろへの強力な攻撃を可能とするなんて、おそらくは鳳凰よりも使用条件は厳しいだろう。
鳳凰なんて、せいぜい５分の無敵状態。それが終われば雑魚艦隊になってしまうのだ。
対してジークのこの兵器。
後ろをとる事で、小が大を食う事が可能なのに、それができなくなれば、数がものをいう。
　達也「こんなの作成できるようにするなよな」
俺は少しクライアントに腹が立った。
しかし、それでもそんな事は言っていられない。
少なくともバックよりは前進の方が圧倒的に早いのだ。
とりあえず、薔薇さんまでがジーク艦隊を抜けた。
ダメージはでかかったが、なんとか突破できた。
俺は息を吐いた。
だが、安心するのはまだ早かった。
ジーク艦隊の半分が、薔薇さんの背後にとりついてきた。
　達也「なんだよ！」
俺は改めてモニタに映し出す。
映し出された艦船は、後ろと前が逆になったような艦船。
　達也「これもかよ」
俺はとにかく逃げなければと思った。
　サイファ「とにかくみんな全速前進！」
　サイファ「俺がギリギリまで押さえる」

みんな余裕がないようで、返事はなかった。
一気に薔薇さんの艦隊が削られた。
　達也「あ」
後方への必殺技。
あの１０．２度の奇跡。
この技は結局調整される事はなかった。
何故なら陣形調整だけで、簡単に防ぐ事ができたから。
今では皆知っている事。
でも、後ろからの、後ろへの攻撃では想定しているわけもなかった。
薔薇さんの旗艦が破壊された。

## 賽は投げられた

俺とキラと真は、なんとか逃げのびていた。
でも、薔薇さんは旗艦を落とされ死亡。
全てを失い、レベルも半分になることになった。
それでも戻ってくるなら、快く迎え入れる予定だったが、後日我が艦隊の前に現れた薔薇さんは、
「やめるは。悪いね。楽しかった。頑張れよ」と、一言残して去っていった。
大切な仲間をひとり失った。
実は少し涙がでていた。
それでも、その後すぐに、グリードさんが入隊を志願してきた事で、少し気分は浮上した。
なんでも前回負けた時、なんとか逃げ延びてはいたらしい。
しかし拠点を全て失い、軍を解体したんだそうだ。
もちろん将官として迎え入れた。
一時は第三勢力にまでなったプレイヤ軍の大将だ。
誰も反対はしなかった。
俺達は数日、無駄に過ごしていた。
その間、今度は紫苑軍がジーク軍にちょっかいをだしていたようだが、まともに戦う気は無いようで、その戦闘時間は短い。
これでは、時間の流れは、ただ勝てる可能性を下げるだけ。
そろそろ決断をしなければと俺は焦っていた。
そんな時、以前から研究していた、第二の秘密兵器の研究が成功した。
正直完成するわけがない、成功するはずはないと思っていたが、良い方に期待が裏切られた。
　達也「無理でもやってみるもんだな」
俺はそう思った。
もしかしたら、この前手に入れたエディソンくんが良かったのかも。
少なくとも今日完成したのは、エディソンのおかげであることは間違いない。
俺は第二の秘密兵器、いや、最終兵器の生産を始めた。
もう他に、逆転手になりそうな研究はしていなかったし、今更やっても間に合わない事は分かっていたから、あえて最終兵器と言わせてもらおう。

この日の夜、宇宙の絆の公式サイト、その中の掲示板は賑わっていた。
普段はあまり見ない掲示板だが、正春からの通信を受けて、俺は見に行く事にした。
見てみると書き込みが大量におこなわれていた。
俺はログをさかのぼる。
流し読みしながらさかのぼっていたから、内容は何となく見えてきていた。
そして、みんなが集まる理由となったであろう、問題の書き込みが見つかった。
内容は、ジークが書いたものだ。
　ジーク「今週末、金曜夜１０時より最終決戦を行うつもりだ。そろそろ決着つけようぜ」
こんな事をわざわざ書く事に、メリットは感じられなかったが、ココは公式サイト、本人以外であるはずがなかった。
勝てる自信なのだろうか。
それとも・・・
いや、メリットはある。
真っ向勝負で一番勝つ可能性が高いのは、ジーク軍であるから、早々に決着をつけるなら良い方法だ。
これだと、相手もとにかく戦力を集めるだろう。

準備されるメリットとデメリット。
比べてメリットが上だと判断したんだ。
でもこれは、我が軍にも美味しい。
今後ジワジワやられる可能性が高かった。
それを、一気に決着がつけられるだけでなく、勝てるチャンスが大きくなったのだ。
最終兵器もおそらく間に合う。
テスト無しのぶっつけ本番になるが、これは一発逆転の切り札になりえる。
俺は掲示板を読み進めた。
紫苑さんの書き込みが見つかった。
紫苑さんの気持ちは微妙なところだろう。
書き込みには
　紫苑「むむ」
とだけ書いてある。
ジークとまともにやり合うか、悩んでいるようだ。
これで何となく、紫苑軍には現状決、め手は無いように感じる。
更に読み進めると、四天王達の書き込みが有った。
紫苑軍四天王は、紫苑さんとは全く関係がない人たちだが、４人はリアル友達だと聞いた事がある。
まあ、何となく聞いた事があるだけだから、本当かどうかは知らないけれど。
書き込みはどれも、最終決戦賛成の書き込みだった。
紫苑さんは悩んでいるようだが、主要な部下が賛成なのだから、最終決戦は現実になりそうだ。
それからしばらくの書き込みの後、紫苑さんの決断が書かれていた。
　紫苑「全面対決(-_-メ)」
四天王がやる気だから、まあこう決断するしかないのだろう。
でもやるからには、絶対勝ちにくるはずだ。
実は俺は、ジークよりも紫苑さんのが強いと思っている。
ただ、それは同じ条件でまともに戦った時という条件だ。
ジークは勝てる条件を、ゲームの中だけでなく、全てを考えて整えてくる。
　達也「どっちもいやな相手にかわりはないけどな」
俺は、４日後に迫った最終決戦の事を考えながら、再び宇宙の絆のゲーム画面を表示した。
すると通信が入っていた。
俺は直ぐに回線を開いた。
紫苑さんからだった。
　紫苑「みた？」
おそらく掲示板を見たかという事だろう。
　サイファ「掲示板は見たよ」
俺は聞かれた事に素直に返事した。
　紫苑「ジークの後はチミだ！」
紫苑さんにしては、よく喋っている。
俺は少し苦笑いした。
俺は紫苑さんの気持ちがなんとなく分かってしまった。
　サイファ「最後は俺と紫苑さんで対決しましょ！」
　紫苑「(^0^)」
どうやら思った通りだった。
同盟はしていなかったが、お互いの攻撃はジークを倒した後にしようという事だ。
そして俺はそれに了解し、向こうも納得したというわけ。
紫苑さんは何故か、信用できる気がするんだよな。

　紫苑「７Ｓ－１２４５８．２８５４３」
最後に紫苑さんは、これだけを残して、勝手に通信は切られていた。
マップ番号？
何を意味しているのかよくわからなかった。
とにかく俺は、最終決戦が楽しみになってきていた。
自分がドキドキしている事に気がついた。
興奮状態を抑えられないまま、俺は友軍の皆に、最終決戦に参加する事と、紫苑軍にはジークを倒すまで攻撃しない事を伝え、掲示板に
　サイファ「楽しみだ！」
と書き込んだ。

## 最終戦争開始

金曜日、俺は全ての準備を終わらせていた。
最終兵器も設置完了。
プレイヤもかなり沢山集める事ができたし、参加できないプレイヤの艦船や兵器も、全て使わせてもらえるよう配置した。
作戦も、いくつかある。
最後の手段といわれる策も準備した。
物資は、最前線へほとんど移動させた。
移動要塞リングに。
ちなみにリングは、マップ間移動可能な拠点だ。
移動速度は遅いが、拠点を移動できるのはおいしい。
まあ、全体マップで直ぐに見つかってしまうから、秘密基地ってわけにはいかないけれど。
　サイファ「真、悪いな。残ってもらう事になって」
実は作戦上、真には本拠地待機してもらう事になっていた。
　真でれら「まあ、勝てるならそれもいいでしょ」
　サイファ「だな。負ければ真も忙しくなるだろうし（笑）」
　真でれら「出番が無いことを祈るよ」
　サイファ「もしもの時は、携帯で起こすかもしれんから、携帯は離すなよ」
　真でれら「ああ、でもこの会戦、金曜の夜からって事は、日曜までやる事を想定してるよな」
　サイファ「だな。完璧に終わらせたいんでしょ」
　真でれら「お前は大丈夫なのか？」
　サイファ「さっきまで寝てたよ。１０時間ほど。終わるまで気合いだぜ」
　真でれら「飯は？」
　サイファ「買い込んである。万全だよ。全て」
そうだ。
全て万全にした。
なんと言っても１０億だからな。
寝るなんてできない。
４８時間耐久だ。
そしてその戦いは、もうまもなくだ。
時計は１０時まで後２分のところ。
俺はもう一度、各ＰＣを確認。
そして、チェックが終わると同時に、１０時になった。

まあ、１０時になったからと言って、いきなり動きが有るわけではない。
静かだ。
俺はもう一度皆に確認を入れる。
　サイファ「基本は守りだ。敵が来てもとにかく突破させないこと。少しずつ下がって、前線を下げてもいい。とにかく隙があるまで守る」
俺の言葉に、皆各々の返事を返してくる。
日頃は見かけない仲間達の名前が見えた。
ちなみに今話してるのは、ゲーム内の通信を使ってる。
通信用チャットを皆に公開しようかなやんだが、おそらく大勢力に寝返る人がいるだろうと考えて、それはしなかった。

　達也「ちょっと面倒だけど、リスクは回避だよな」
俺は自身に納得させ、ジークの動きをただただ待った。
１０分ほどしてからか。
紫苑さんから通信が入った。
俺は回線を開く。
　紫苑「激突ぅ！」
どうやら先に紫苑軍領に侵攻したようだ。
　サイファ「こっちはまだ」
俺は簡単にそう返した。
とたんに、前線からの通信が入った。
これはチャットの方だ。
　グリード「きたきたー！」
俺は紫苑さんに
　サイファ「こっちも来た！ではまた！」
と通信を送って、回線を切った。
ジークはどうやら両方同時に攻撃してきたようだ。
戦力が分散される分不利なはずだが、それでもやるって事は、何か策があるのだろう。
俺はとにかく慎重に状況を見ていた。
とりあえず今は後方で補給活動をしているだけだから、自身は楽だが、最前線のグリードやキラ、カニさんやモモさんは苦労しているだろう。
状況は逐一入ってきてはいるが、はっきりとはわからない。
　ＬＯＶＥキラ「じれったいな。本気で来てない気がするな」
　グリード「確かに、二手に分かれて両方はきついもんな」
　今日子「とりあえず、こっちは押さえれば良いと思ってるのかも」
状況が自分で見れないのはやはり辛い。
俺はキラに状況を通信で送ってもらう事にする。
　サイファ「キラ、ちょっと状況送って」
　ＬＯＶＥキラ「おけ」
俺は自分の目で確認する。
確かに、破壊を目的に攻撃しているようには感じなかった。
俺は再び、紫苑さんへの通信を試みた。
直ぐに回線を開いてくれた。
　サイファ「ジークは本気で来てる？」
　紫苑「旗艦おる」
俺は驚いた。
旗艦がおるって、本艦隊が出てるのか。
それは本気を表す。
　サイファ「だったら、こっちは攻勢だ！」
　紫苑「(^0^)」
俺は作戦を変更する事にした。
こっちに来てる艦隊が少ないなら、一気にまずはそれをたたく。
大で小をたたくのは基本だ。
　サイファ「ココは俺が受け持つから、全艦でジーク軍艦隊をたたけ」
　ＬＯＶＥキラ「だな。削れる時に削るぜ」
　グリード「でも油断すんなよ。少なくてもジーク軍だからな」
　今日子「拠点はどうする？」

　サイファ「物資の補給拠点っぽい所だけは落とそう。惑星なら今日子さんよろしく」
　今日子「はいなｗ」
俺と最低限の守りをするための艦隊以外は、全てジーク軍への本格的攻撃を開始した。
俺達の攻撃は、直ぐに目の前のジーク軍を蹴散らすと、敵領域に侵攻してゆく。
かなり順調だ。
敵艦隊を次々と破壊してゆく。
でも・・・
不安が襲ってきた。
なんだろう。
あまり勝ちすぎると、おかしいと思うのは、当然だ。
なんせこんな時には今まで何かが有ったのだ。
そしてやはりというか、その動きが見えた。
　ＬＯＶＥキラ「今機影が右の方に見えなかった？」
　今日子「何かいたよね」
　グリード「追うか？」
　スピードスター「早すぎる♪」
　スーパーモモ「今の艦隊、すっごい早かったよ。追いつけないんじゃ？」
どうやら、こちらに向かって、超高速の艦隊が進んできてるようだった。
　サイファ「数は？大したことなければ、俺が受け持つよ。」
　ＬＯＶＥキラ「どうだった？」
　グリード「わからん」
どっちにしてももたもたしていられない。
戦況は、瞬時の判断で変わるのだ。
　サイファ「いや、俺が受け持つ。こっちの領内だし、最悪逃げ回るから（笑）」
　ＬＯＶＥキラ「了解」
キラの返事の直後、正面に先ほどの艦隊と思われる機影が見えた。
そして直ぐ、全てがこちらに見えるところまで近づいてくる。
艦隊は、七転八倒艦隊だった。
その規模は大きい。
　達也「おいおい、大艦隊じゃねぇかよ」
俺は右まわりで敵から離れようとする。
接近が速く回避はできそうになかった。
　達也「ココで使わないとダメなのかよ」
俺は鳳凰を発動して突破を計った。
相手はあっさりと突破を許してくれた。
なんだ？
敵艦船を調べる。
あの後ろにも攻撃できる艦船ではない。
どうしたんだ？
とりあえず俺は敵艦隊を突破し、逃げた。
敵艦隊は、左に旋回し、こちらの後ろを追ってきた。
もしかして・・・
敵はこちらの後ろにとりつき、ずっと追いかけるつもりだ。
スピードは向こうが上だった。
スピード特化の艦隊ようだ。
数で負けている以上、ここから戦闘にはいけない。

とにかく逃げた。
自軍領域だからなんとか逃げ続けた。
キラ達からチャットによる通信が入ってきてはいたが、こたえる余裕がない。
とりあえず、キラの方は順調そうだから、俺は一言だけ返した。
　サイファ「逃げまくり。後で」
とりあえずわかってくれたようで、しばらくこちらに返事を求める通信はなかった。
しかしきつい。
とにかくおにごっこ状態。
小回りのきく子供が、遊びなれた公園で大人とおにごっこして逃げている感じだ。
でも、逃げ続ければ、おそらく燃費はこちらが上だ。
そのうち向こうは撤退せざるを得ないだろう。
俺は必死に逃げ続けた。
そんなおにごっこの最中、モニタの上に表示が有った。
　「紫苑軍壊滅」
俺は一瞬信じられなかった。

# 些細な大勝利

全体マップでは、紫苑軍領域は、いろいろな色の光が輝いていた。
これは紫苑の旗艦が落とされた事を意味する。
ふと思った。
もしかすると、薔薇の貴公子さんが落とされた方法で落とされたのだろうか。
でも、紫苑さんが落とされるだろうか？
まあ、今はそんな事を考えている場合ではない。
おそらく拠点を奪ったり残党狩りは後回しに、直ぐにこちらに攻めてくる事は明白。
俺は必死に命令を出す。
　サイファ「リングに集合！」
それだけが精一杯。
やはり戦力を分けたのは失敗。
いや、大将が単独行動してどうするんだよ。
後悔したが、今はとにかく皆と合流しなくては。
しかしうまく進めない。
後ろの七転八倒艦隊においかけられては、なかなか思うようにはいかなかった。
いつの間にか、紫苑軍の領域だった場所に近いところに追い込まれていた。
気がついた時には、ジークの大艦隊に囲まれていた。
見ると、その中には、紫苑軍の四天王の艦隊もあった。
　達也「寝返ったのか？」
納得がいった。
流石の紫苑軍でも、四天王が裏切ったら、流石に負けるだろう。
どうして裏切ったのか、そんな事はわからないが、なんとなく掲示板の書き込みが思い出される。
もうあの時には、ジークにとりこまれていたんだな。
そう思った。
そしてもうダメだとも思った。
ここから本拠地やリングまではかなり遠い。
かりに鳳凰で突破しても、そこまで燃料が持たない。
　達也「こんな形で最後の策を使う事になるとはな」
俺は通信をしようとチャット画面を見た。
いやそちらを向く前に、通信が入った。
とりあえず鳳凰を発動しつつ、通信を開く。
相手は、元紫苑軍の腹心、今は臨時軍の大将となっている紫陽花さんだった。
紫陽花さんは、回線を開くと、ただ
　紫陽花「来て！」
とだけ通信してきた。
一瞬なんの事だかわからなかったが、臨時軍の拠点となっている位置が「７Ｓ」である事を見て、何かあると悟った。
　達也「紫苑さんが言ってた場所だからな」
俺はとにかく突破をはかる。
タイムリミットはおそらく２，３分。
その間に突破する。
一瞬一瞬に判断を迫られる。
俺は必死に操作した。

流石は四天王とジーク軍。
容赦ない。
四天王のひとり群青さんは、あまり面識がないから、動きが読めない。
　達也「うまいな」
こっちに手を抜く隙も、楽に逃げる隙も与えてくれなかった。
　達也「寝返らなくても、これだったら勝てたんじゃね？」
そんな戦闘の中、俺はなんとか突破に成功した。
後は７Ｓマップまで逃げる。
何があるのだろうか。
行って何も無ければ終わり。
かといって、他に方法もない。
俺はとにかく紫陽花さんのいる場所を目指した。
ココにきて助かったのは、七転八倒さんの高速艦隊が姿を消した事だ。
俺のスピード以上の艦隊はなくなった。
だが良いことばかりではない。
いや、むしろ最悪か。
左からジーク本艦隊が近づいてきていた。
これはもう後は紫陽花さんにかけるしかなかった。
俺は無事７Ｓマップに到着した。
　達也「えっとどうすれば」
俺は以前の紫苑さんの言葉を思い出す。
　紫苑「７Ｓ－１２４５８．２８５４３」
そう言っていた。
俺は言われた位置に移動した。
うしろから追う艦隊は、なんだか勝ちを確信したように追いかけてくるように感じた。
こっちは燃費の悪い鳳凰を使って、もう移動する燃料もわずかなのだ。
俺は言われた場所に到着した。
さて、どうなるのか。
何も起こらない。
紫陽花さんに通信を試みようとしたが、ジーク軍が近づいてきたので俺は完全に諦めた。
目を閉じた。
　達也「つかれた」
一気に肩の力が抜けた。
やられるのは見たくなかった。
その時だった。
ＰＣから爆発音が鳴り響く。
俺は驚いて目を開けた。
なんとジーク軍が一気に破壊されていた。
近づいてきていたジーク軍は右往左往していた。
　達也「移動要塞の攻撃か」
紫陽花さん臨時軍の７Ｓマップにある拠点は、最強と言われる移動要塞ルーだった。
俺に教えたマップの座標。
それは移動要塞ルーからの攻撃の死角になる位置のようだ。
俺はしばらくジーク軍のやられるのをただ見ていた。
しかし流石ジーク軍、艦隊を立て直し再び攻撃してこようとしている。
　達也「やれなかったのか」

俺は期待はしていたが、それでもどこかダメだろうとも思っていた。
ショックは無かった。
そんな時、拠点から紫陽花艦隊と他数艦隊が出撃してきた。
更には俺の必殺技であった鳳凰を発動した。
　達也「なんでじゃー！」
俺の驚きをよそに、紫陽花軍は弱ったジーク軍に追い打ちをかけた。
終わってみれば、紫陽花軍の大勝利。
さらには俺達の大勝利で、一旦会戦は終了した。

## 裏切り

紫苑軍が壊滅し、紫陽花軍がジーク軍を追い返した戦いの後、紫陽花さんは我が軍に投降してきた。
紫陽花さんの話だと、紫苑さんがもし負けたら、後は俺の協力をすることに決まっていたらしい。
理由は、紫苑さんと、我が軍のスピードスターさんが、実はリアル友達だそうで、裏で色々やっていたらしい。
鳳凰が紫苑軍に伝わっていたのも、その為だ。
更には、紫苑さんと紫陽花さんは夫婦だそうで。
まあ、ネット上の人なんて、誰と誰がつながっていても不思議ではないけど、これはビックリだ。
俺は紫陽花さんを我が軍に受け入れた。
時計をみたら４時になっていた。
昼寝していたので、まだ全然眠くはなかった。
ジーク軍も我が軍も、次の会戦に向けて準備をしていた。
今度はタイマンだ。
紫苑軍の大部分を吸収し、今や戦力は互角以上だ。
しかし相手はジーク軍、油断はできない。
なんせあの四天王も寝返ったのだ。
そういえば、どうして裏切ったのか。
俺は気になって、紫陽花さんにたずねた。
　サイファ「そういえば、四天王ってなんで裏切ったの？」
　紫陽花「なんだか、リアルマネーで１０００万円振り込まれたらしいよ」
驚きだ。
勝つためにお金を先に払えるか？
まあ、勝てる可能性がかなり有るとはいえ。
勝てなかったらどうするつもりだろう。
他人の心配などしてもしかたないな。
俺は自分の心配をする事にした。
　サイファ「そんな事するジークだから、もしかしたら我が軍にもいるかもなぁ」
　紫陽花「いるだろうね。星さんもある意味裏切ってたみたいなもんだし」
そのとおりだ。
結果的には星さんには助けられたけど、敵と内通していたのだから。
　サイファ「誰も信じられなくなるな（笑）」
　紫陽花「旦那も今、もう誰も信じねぇー！って言ってる（笑）」
そらそうだろうな。
四天王に裏切られたんだから。
金の力がなければ、優勝は紫苑さんだったかもしれないのに。
　サイファ「じゃあ、紫陽花さんも、もしもの時はあの手使いますからよろしく」
俺は最終手段の作戦の確認をして、通信を切った。
まもなくして、再びジーク軍との戦いが始まった。

正面からの戦いは、若干我が軍が有利に見えた。
紫陽花さんが鳳凰を使って暴れ回る。
正直、俺以外で使える人がいない兵器だと思っていたが、密かに補給に強い艦隊を作っていたようだ。
てか、我が軍は俺がいるから、補給艦隊がいないのだ。
他の軍ならいても当然だな。

とにかく完全に、我が軍有利に見えた。
紫陽花さんは特に四天王に対して容赦なかった。
そんな中、通信が入った。
　「リング交戦中。七転八倒艦隊です」
またどこからか高速で抜けて、背後をついたようだ。
しかし、リングは守りが堅い。
たとえ大艦隊でもそうそう落とせるはずもない。
でもまあ、放っておくわけにもいかない。
何故なら、あそこは補給の拠点だ。
ずっと交戦状態だと、そのうち補給に影響がでる。
俺はキラと星さんに声をかける。
　サイファ「キラと星さんついてきて。後背のゴキ退治に行く」
　ＬＯＶＥキラ「おけ」
　スピードスター「♪」
俺達３人は、リングへと向かった。
しばらく航行していて、後数分でリングというところで、全体マップのリングの光が、敵の卵色の光の点に変わった。
　達也「え？何で？」
俺は慌てて、リングの守りを担当していたシャアさんに通信した。
　サイファ「シャアさん、どうしたの？」
　シャア「ごめ。ジークが勝ったら１０％くれるって言うから、寝返った。てか、元々ジークのスパイだし」
最悪だ。
予想どおりスパイはいた。
これもゲームだ。
規約違反は無い。
ルール違反でもなければ、悪いわけでもない。
だけど、だけどあまりにもひどいと思った。
一番の重要拠点がとられたのだ。
我が軍のほぼ全ての物資を集めている。
これは負けた。
そう思った。

## 宿命の対決

土曜日の午前１０時、何とか態勢を立て直した我が軍だったが、物資の不足では勝てるわけもない。
我が軍はかなり疲弊していた。
このまま負けると誰もが思っていたが、ココで一筋の光明が見えた。
俺にとどめをさそうと、ジークの本艦隊がでてきたのだ。
これは最後のチャンスだ。
我々の勝つ術は、敵の旗艦破壊しかない。
俺は皆に通信を送る。
　サイファ「最後まで一応頑張ろうぜ」
最後の策を使う時だ。
だが、それをチャット通信で伝えるわけにはいかない。
その状況になったら皆にはそうするように伝えてある。
もちろん、シャアさんにも。
でも、それに備えるよう命令はできない。
警戒されるから。
みんなに「まだあきらめるな」と「もう負けは決定」という意味を両方伝える事が必要だった。
だから「最後まで、一応頑張ろうぜ」
「まだあきらめるな」には、もう少し時間が欲しいからのメッセージ。
「もう負けは決定」は、シャアさんを通じて、ジークに諦めている事を伝えて、油断させる為。
ジークが通信してきた。
俺は通信を許可。
　ジーク「やっと終わるな（笑）」
　サイファ「お前だけには負けたくなかったのにぃ～」
ジークに諦めている事をさりげなく伝える。
いや、さりげなくはないか。
とにかくジークをのせないといけない。
　サイファ「キサマだけにはたおされん。最後まで逃げてやるぅ～」
俺は必死に逃げるそぶりをする。
　ジーク「バーカ！逃げられるかよ」
うまくいっているようだ。
俺はとにかく逃げた。
俺とＬＯＶＥキラと真でれらしか知らない、最終兵器のある場所へ。
　ジーク「まだ何か隠してるのか？」
ジークの言葉にドキッとした。
ばれてるか？
こういう時、チャットだと動揺が見えないから嬉しい。
　サイファ「ああ、もちろんだ。てめぇの旗艦を瞬殺してやるのじゃよ」
俺はそう言って鳳凰を発動し、敵旗艦に向けて突撃する。
　ジーク「無駄だって。わかってれば怖くねぇよ」
ジークの言うとおり、あっさりと俺の突撃はかわされた。
でもそれはわかっている事。
とにかく俺は、ジークをあの場所に連れて行かないと。
その合間に俺は正春に電話した。
　達也「最終兵器使うぞ。俺の事はどうでもいい。ジークをやる」

　正春「おけ」
　達也「俺今いそがしいから、真にはそっちから連絡宜しく」
　正春「成功すればいいけどな」
　達也「ああ。じゃあな」
俺は電話を切った。
その後もとにかく逃げ回った。
そしてうまく追い込まれたように、俺は隅のマップまでくる。
俺は最終兵器の射程内に入った。
そう、ココは最後の作戦、最終兵器の配置してある場所。
まさか研究生産が成功するとは思っていなかった、強力な兵器がある。
どれくらい使えるかわからない。
なんせテストする暇がなかったから。
　達也「１発撃つのに、今回の会戦で使った燃料の１００倍くらいは必要そうだからな」
そうなのだ。
テストするには、沢山の燃料を手に入れられる時間が必要だった。
艦隊用のを除けば、１発分しか無かった。
これが敵旗艦を倒せるほどの威力なら、俺の勝ちだ。
なければ負け。
ジークをうまく誘導できた。
ジークはもう警戒もしていないようだ。
　達也「紫苑さんのが、やっぱ戦場では強かったな」
俺はなんとなく笑みがこぼれた。
でも心臓はドキドキしている。
緊張する。
今になって思う。
１０億だよ？
俺の取り分は今２億予定。
ドキドキは増した。
おそらくジークも緊張しているのだろうか。
金持ちそうだから、大したことないのかも。
ジークの艦隊が近づいてきた。
まだ射程距離じゃない。
おそらくジークが気がつく時には、射程内だ。
もう何もないと油断している。
そして今、射程内に入った。

# 終焉そして…

最終兵器の威力は半端なかった。
我が旗艦を含む艦隊と、ジークの本艦隊は、一瞬にして消滅していた。
自分を餌に、ジーク自身を誘き出し、とうとうジークを倒した。
まあ、俺自身も死んでるけど、対策は万全だ。
最初から死ぬ作戦なのだ。
絶対こちらの方が対応が早い。
更にジークは、こんな事が起こる事を想定していなかったかもしれない。
とにかく俺達の対応は早かった。
まずお互いの軍は全て一度バラバラになった。
しかしこちらは、バラバラになるのを想定していたから、直ぐに新たに立ち上げた臨時の真でれら軍に集った。
集まったばかりだと志気が低いが、それでもバラバラの相手よりは遙かに良い。
俺もレベルは半分だけど、真でれら軍に入る。
真は完璧に反撃準備をしていた。
直ぐにリングを取り返した。
無傷の真でれら艦隊は強かった。
敵は全てつかれているか、志気が低いか。
バラバラになったジーク軍をかなりやったところで、ようやく七転八倒軍に集ったジーク軍だったが、俺達の勝ちは揺るぎなかった。
土曜日の夕方には、七転八倒軍の艦隊はほとんど壊滅していた。
まあ、その時こちらもかなり疲弊していたけど、統一は時間の問題だった。
そんな時みつけたのが、ダイユウサク軍の大艦隊だった。

　サイファ「いやぁ～完全に勝ったんだけどな」
　ＬＯＶＥキラ「ジークには勝ったけど、完全に忘れてたな」
　真でれら「ああ。ダイユウサク軍って、全く今まで戦ってなかったから、戦力たまりまくりだったし」
　今日子「どうして戦わずに済んだんだろう？」
　グリード「わからん。よく考えたら、俺の軍もダイユウサク軍の領域に隣接してたのに、何故か戦闘がなかったからな」
　スーパーモモ「とにかく目立たなかったのが良かったんだねｗ」
　紫苑「(^0^)」

・・・

まあ、結局ジークに勝ったけど、ボロボロだった俺達は、完璧な状態のダイユウサク軍の艦隊にボコボコにやられた。
１０億円はもちろんダイユウサクさんにもっていかれた。
それでも、俺は敢闘賞とかなんとか言われて、１００万円は手に入れたけど。
その金は、オフ会を開いて結局飲み食いに使った。
いや、あの時の豪遊は楽しかった。
集まった面子も面白かった。
今日子さんは、実はまだ女子高生だったり、グリードさんはかなりのおじさんだった。

モモさんはネカマだったり、カニさんは結構有名な女優だったり。
でも一番驚いたのが、紫陽花さんが知ってる人だった事。
中学時代の部活の先輩だった。
名前は忘れてたけどね。
まあそんな感じで、楽しい３年間は終わったのだ。
で、今はと言うと、また新しいネットゲームをしている。
宇宙の次は、大陸だった。
宇宙の絆では運良く優勝争いをした俺だけど、今回は弱小軍の下っ端をやってる。
まあそれでも楽しい。
また色々集めては売ったりして金儲けもしてるし。
って俺、戦国時代のゲームで商人かよ！

## 著者より

「宇宙の絆」読んでくださいまして、ありがとうございます。
この作品は、こんなインターネットサイトがあれば良いなと思ったところから、書き始めました。
続き「宇宙の絆Ⅱ」もありますので、そちらも読んでいただけると嬉しいです。

２００７年　秋華

# 宇宙の絆

http://p.booklog.jp/book/48828

著者：秋華
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kitaneko33/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/48828

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/48828

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.